

第IV章 遺 物

1 土 器

SD6030 からは土師器 928 点と須恵器 2 点が出土し、SD8520 からは土師器 92 点が出土した。SD6030 の堆積層は砂と黒色粘土との互層で、細別すれば 7～9 層に分けられる。堆積層序は必ずしも整合でなく、異なる堆積層から出土した土器が接合する場合も少なくない。しかし、特徴的な様相を呈する器種——小型丸底壺、器台、椀、高杯、甗など——の細別層位ごとの出土状況を総合的に判断して、下の 4 層（北区では 5 層）、上の 3 層（北区では 4 層）に明瞭に分別しえた。そのためここでは下層出土土器と上層出土土器の 2 群に分けて報告する。SD8520 の堆積層は砂と粘土の互層で、細別すると 7～8 層に分かれるが、堆積層の随所に層序の乱れがあった。したがって層位別の区分はおこなわずに一括して扱った。

整理の過程においては可能な限りの個体識別をおこなったが、記述に際しては口縁部を残す個体に限り数量を表記した。各個体の法量および器面の色調等は必要に応じて本文でふれ、図版に掲載したすべての資料については別表 1 に出土地区・層位とともに示す。器面調整技法の図版上での表現は、ハケメ調整、ミガキ調整、ケズリ調整、タタキ調整についてはその痕跡状況を図示し、ヨコナデ調整についてはできる限りその範囲を“——”で示した。また土器焼成の際に器表面に生じた黒斑は範囲を網目で示した。

ここで調整技法について若干ふれておく。器面調整とは器体成形の過程で生じた器面の凹凸を平滑にならし、また器表面を使用の便に備えて緻密化したり、逆に粗面につくるための技法である。SD6030 出土土器にみられる調整技法にはナデ調整、ケズリ調整、ハケメ調整、ミガキ調整、タタキ調整があり、1 個の土器をしあげるにはこれら諸技法を目的に応じて使い分け、また重複させている。

ナデ調整 1) ナデ調整 器面を擦過することにより平滑にしあげることを目的とした技法で、そのうち水平方向に連続して施すものを特にヨコナデ調整と呼ぶ。ナデ調整は土器製作過程で最も多用される技法で、粘土紐（帯）接合作業の際、接合部分を密着させるために施す場合や、ハ

器面調整

	SD 6030 下 層			SD 6030 上 層	
	北 区	南 区		北 区	南 区
	比率%	比率%		比率%	比率%
小型丸底壺 A	33(14.3)	58(24.0)	小型丸底壺 C	1 (1.9)	10 (2.5)
器 台 A・B	19 (8.3)	10 (4.1)	甗	0 (0)	14 (3.5)
椀 A	23(10.0)	23 (9.5)	高 杯 B	14(25.9)	185(46.0)
高 杯	9 (3.9)	9 (3.7)	高 杯 C	13(24.1)	74(18.4)
壺	25(10.9)	36(14.9)	壺	2 (3.7)	24 (6.0)
甗	117(50.9)	105(43.4)	甗	21(38.9)	76(18.9)
そ の 他	4 (1.7)	1 (0.4)	そ の 他	3 (5.5)	19 (4.7)
計	230 (100)	242 (100)	計	54 (100)	402 (100)

Tab. 2 SD6030 土師器地区別個体数

ケメ調整あるいはケズリ調整の上に重ねて施すこともある。ヨコナデ調整は口縁部の調整にはほとんど例外なく用いられ、甕の短く立ち上る口縁部を内彎させたり外反させたりする成形作業においても、ヨコナデを強く繰り返すことにより意図する形状につくりあげたものと考えられる。ナデ調整の多くは指腹部に水をつけておこなったのであろうが、布や皮革に水分を含ませて擦過したこともあり、後者の方法によれば同時により広い範囲をナデることができる。

2) ハケメ調整 ナデ調整に次いで多用されている調整技法で、器面の凹凸を平滑にするには極めて有効な技法である。削りに近い効果を発揮するが、場合によってはすでに平滑にしあげられた器面を粗面化するために施されることもある。ハケメの原体には柾目板の木口面を利用したことが解明されており、木理の堅緻な部分の擦過痕跡が“ハケメ”の条痕として器面に残るものと考えられている¹⁾。同様に小板材の稜角を利用した調整技法に板ナデ調整²⁾がある。この痕跡は木理条痕がごくかすかに残り、しばしば削りに近い効果をもつ。

ハケメ調整

3) ケズリ調整 器壁を薄くしあげる場合に有効な技法で、器形を整える際にも用いられる。SD6030 では壺・甕類を中心に多用されており、とくに甕Aでは体部内面を入念に削り取ることににより極めて薄い器壁を作りあげている(PL.27-4)。ケズリ調整は通常「ヘラ削り」と称されているように、道具にはヘラ状のものが考えられているが、使用する部位により種々の形態をとっていたと思われる。壺・甕類の内面器壁を削り取るにはそれにふさわしい細長い、しかも刃部の幅が広いものであっただろうし、また高杯B・Cの脚部内面を削り取る際には後述するように細長い形態を呈する道具が考えられる。材質としては木、竹、金属、石、貝殻などが想定されるが、現状では限定しえない。ケズリ調整を施す工程は、素地土が十分に柔かい段階と、ある程度器壁が固まった段階とがあり、器種により、あるいは個体の部位により施す時点は異なる。

ケズリ調整

4) ミガキ調整 ミガキは生乾きの状態にある器面を表面が堅緻で平滑な道具で強く擦過することにより器表を滑沢にしあげるものである。器面の仕上げ調整として、器面を全体的に緻密化させる場合(PL.27-6)と、間隔をおいて規則的に施すことにより紋様の効果をもたせる場合とがある(PL.27-5, 7,)。普通「ヘラミガキ」と称されるが、道具の形態はヘラ状のものと限定されるものではなく、また材質には木、石、貝殻、金属などが考えられる。一方刃部をもった道具の刃部を器面に対し鈍角に当てて擦過することによりミガキに近い効果を得ている調整技法がある。ヘラナデ調整と称するが、小型丸底壺A、器台A・B、高杯B・Cなどでは口縁部と体部あるいは杯部と脚部の接合部分を中心に上方にケズリ調整、下方にヘラナデ調整を同一の道具で連続して施している。

ミガキ調整

5) タタキ調整 器表面を平板な板で打ち叩くことにより粘土紐巻上げ時の凹凸を均らす技法で、SD6030 出土土器にはごく少数の製品にのみみられる。タタキ調整の痕跡はタタキ目として器表に残る。これはタタキ板の表面に刻まれた平行凹線の圧痕である。タタキ技法は須恵器製作の特徴的な成形技法の一つとして知られるが、須恵器の場合は内面を当て道具で押え、外面から叩き板で叩きつけるもので、器壁を叩き締め伸展させる機能を果たしている。それに

タタキ調整

1) 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第23号, 1978.

3.

2) 横山「前掲書」ではハケメ調整の範疇に入れられているが、調整する部位やその効果の特質から一応類別して考えておく。

対し弥生式土器とその系譜上にある庄内式土器にみられるタタキ技法では、おそらく内面からの道具は用いられていなかったと考えられ、成形時に器体に生じた歪みや器面の凹凸を平滑化することを目的にしていたと推測される。またそのための技法としてはハケメ調整やケズリ調整に比べるとすぐれて有効な方法であると思われる。

A SD6030 下層出土土器 (PL. 15~18, Tab. 2・3, Fig. 12~20)

下層からは472点の土器が出土した。すべて土師器で須恵器を含まない。各堆積層のうちもっとも多く出土したのはⅢ砂で、全体の4割強を占めており、ついでⅡ砂が2割であり、他の層は1割前後となっている。また北区と南区の出土数はほぼ近似している。

i 土師器 (PL. 15~18 Tab. 2・3, Fig. 12~20)

出土土器の器種には小型丸底壺、器台、椀、把手付椀、蓋、高杯、壺、甕がある。このうちもっとも多いのは甕222点で、ついで小型丸底壺91点、壺61点、椀50点、器台29点の順になっている。

a 小型丸底壺 (PL. 15, Fig. 12)

丸底の小さな体部と大きく広がる長い口縁部をもつ小型の壺で、91点ある。胎土は精良で、成形、器面調整とも非常にいいにおこなっている精製品である。形態と製作技法の違いからAa, Ab, Acの3種に分けられる。

小型丸底壺
Aa

小型丸底壺 Aa (1~10) 扁平な半球形の体部にわずかに内彎し、あるいは直線的に外傾する長い口縁部がつき、底部はやや尖りぎみの丸底である。口縁端部は弱く外反し、うすく丸くおわる。87点。口径10.5~12.6 cm, 器高6.5~8.1 cmをはかり、口径に対する体部最大径の比率は64~46%, 口縁部の高さに対する体部の高さの比率は92~53%と個体による差異が大きい。口径に比して体部最大径の小さなものほど口縁部の高さに対する体部高の比率が小さいという傾向がみとめられる。器面調整はいくつかの手法を重ねて入念におこなっている。まず口縁部外面下半部から体部外面、底部外面にかけてはケズリで器形を整える。但し、ケズリ調整のみられないものもある。ケズリ方向は底部でヨコ方向、以上の部位ではタテ方向をとる。口縁部外面上半部および内面はハケメを施すが、その痕跡はほとんど残らない。口縁部内外面にはヨコナデ調整、外面の残余の部位にはナデ調整を施し、更に内外面全面にわたり、幅1 mm前後の細いヨコ方向のミガキ調整を緻密に施す。約半数の個体では口縁部内面に正放射状あるいは斜放射状の細いミガキを加えている。器壁は橙褐色ないし灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を含まない。1の外面には全面にススが付着し、この内面には部分的に黒色炭化物が付着している。また口縁部の小片であるが内外面に赤色顔料を塗布したものが1

小型丸底壺

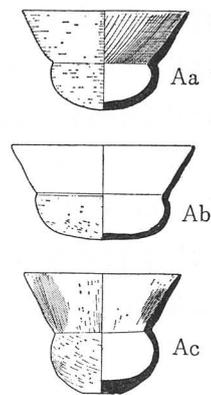


Fig. 12 SD6030
下層出土の
小型丸底壺

点ある。

小型丸底壺 Ab (12) 扁平な体部をもち底部は平坦に近い。Aa に比して口径はほぼ同じであるが、頸部径および体部径が著しく大きい。口縁部はうすく、端部はやや内側に巻き込みかげんに内彎する。3点。体部内面はハケメ、外面をケズリで調整したのちナデ調整を施し、口縁部内外面はヨコナデでしあげる。器面があられているためヘラミガキの有無は確認しがたい。明褐色を呈し、胎土中に微細な砂粒を多く含む。口径12.6 cm, 器高6.6 cm。

小型丸底壺 Ab

小型丸底壺 Ac (11) Aa に比べて口径に対する体部径の比率が大きく(74%), また口縁部の高さと同様はほぼ等しい。底部はわずかにくぼんだ平底をなし、口縁端部はうすく丸い。1点のみ出土。内外面全面をハケメ調整で整えたのち、体部内外面をナデ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。口縁部内外面にはタテ方向の緻密なミガキ、体部外面には斜方向の粗いミガキを加えるが、ミガキの幅はAa より広い。灰褐色を呈し、胎土中に細かい砂粒を含む。口縁部の外面に大きな黒斑があり、約90度位置を離れた部位にも内外面に黒斑がある。口径10.9 cm, 器高8.4 cm, 底径2.6 cm。

小型丸底壺 Ac

b 器 台 (PL. 15, Fig. 13)

小型の器台で、浅い小皿状の受部と直線状に下方に拡がる脚部からなる器台Aと受部が直線状に外傾し脚部との境が開口する器台Bとがある。A・Bともに精製品で胎土も精良である。

器台A(13・14) 10点ある。小皿状の受部は底部が丸味をおび、口縁部は短く直立し、端部が若干外反する。脚部の端部はわずかに外反し、うすく丸い。脚部のはぼ中位の3方に円形の透孔がある。脚部内面上端付近にはかすかなシボリ痕跡がのこる。脚部内外面はハケメで調整し、外面にはさらにヨコナデが施される。受部は内外面をヨコナデ調整し、外面下端付近をケズリで整える。ケズリはタテ方向に細かくおこない、脚部の上部約3分の1の範囲にまで及ぶ。脚部外面、受部内外面にはヨコ方向の細かいミガキを緻密に施すが、内面に比して外面はやや粗略である。受部内面には正放射状のミガキを加える。受部の成形は脚部上端を水平に切り取り、その上面に刻み目を交叉させたのちに粘土紐を積み上げておこなっている(PL. 27—6)。黄褐色ないし淡褐色を呈し、14の脚部下半には赤味をおびた黒斑がつく。胎土は精良で赤褐色軟質の微粒や白色の砂粒を含むものがある。口径7.6~9.1 cm, 器高8.9 cm, 裾径11.7~12.1 cm。

器台 A

器台B(15・16) 19点ある。脚部上端にはシボリ痕跡がわずかにのこる。脚部内面の器面調整には、(i) ヨコ方向にケズリ調整をおこなったのち、端部付近にヨコ方向のハケメ調整を施すもの、(ii) 全面に弱いハケメ調整を施すもの、(iii) (ii) ののち端部付近にヨコ方向のケズリを

器台 B

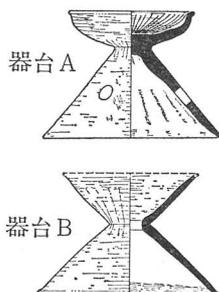


Fig. 13 SD6030下層出土の器台

施すものの3者があり、(ii)と(iii)の場合には指押え痕跡がのこる。脚部外面は斜め方向のハケメ調整ののちナデ調整を施す。受部は内外面をヨコナデで調整し、外面の端部付近をのこして以下の部分にタテ方向のケズリをおこなう。ケズリは脚部上端におよぶ。この部分ではヘラナデの状況を呈する。受部内外面と脚部外面に細かいヨコ方向のミガキを緻密に施す。成形にあたっては、脚部と受部は別々に作り、のちに両者を接合したものと考えられ、脚部内面上端には、接合時の粘土のうすいかぶりがみられる。灰褐色ないし赤褐

第IV章 遺物

色を呈し、胎土は精良である。15の脚部内面全面および16の内面上半部にはススがうすく付着している。口径 8.8~9.0 cm, 器高 8.2 cm, 裾径 11.9~12.5 cm。

c 碗A (PL. 15, Fig. 14)

碗 A 碗A(17~22) 丸底の浅い体部に2段に屈曲して外反する短い口縁部のつく碗形の土器。46点。口縁部の形態には屈曲のごくゆるやかなものと、屈曲が強く、とくに上段が強く外彎するもの、それに両者の中間的なものがある。内面および口縁部外面をヨコナデ調整し、以下の外面はケズリで整える。ケズリの方向は上半部ではタテ方向、下半部(底部外面)ではおおむねヨコ方向をとる。内外面全面はヨコ方向の細かいミガキでしあげるが、内面の緻密さに比して外面では間隔が粗い。黄褐色ないし灰褐色を呈し、胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。内面に正放射状のミガキを加えるものが1点あり(17)、これについては胎土がやや粗く、砂粒を多く含む、色調も灰褐色で、他の45点とは異なっている。18および19の体部から底部外面にかけては黒斑がある。口径は 15.4~16.2 cm のものが多いが、14.0~15.1 cm のやや小さいものも若干ある。器高 4.6~5.7 cm。

d その他の碗 (PL. 15, Fig. 14)

碗 X 碗X(23~25) 23は口縁部の破片。口縁端部は丸く、内外面をヨコナデ調整する。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径10.5 cm の、浅い碗形の器形に復原できる。24は半球形の小型の碗。内面と外面の上半部をヨコナデで調整し、外面の下半部はケズリで整える。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径9.8 cm, 器高5.0 cm。25は平らな底部に、わずかに内彎しつつ外傾する口縁部のつく小型の器。口縁端部はうすく尖る。口縁部上半部の内外面にヨコナデ調整を施すが、以下の部分是不調整で、指押え痕跡が顕著にのこる。底部の周縁は両側から指で押しあげられ、わずかに突出する。黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径8.7 cm, 器高 4.1 cm, 底径 4.0 cm。

e 把手付碗 (PL. 15, Fig. 15)

把手付碗 把手付碗(27) 小さな平底と内彎して立ち上る口縁部からなり、口縁部の中位に1対の把手がつくもの。現状では把手を欠き、把手を装着した円孔が1ヶ所にのこる。口縁部上端付近にヨコナデ調整を施し、以下は不調整である。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面下半部から底部にかけて黒斑がある。口径 9.3 cm, 器高 8.3 cm, 底径 4.5 cm。

f 蓋 (PL. 15, Fig. 15)

蓋(26) 平坦な頂部に外反しつつ下方に拡がる縁部のつく蓋形土器。1点。頂部外面をナデ

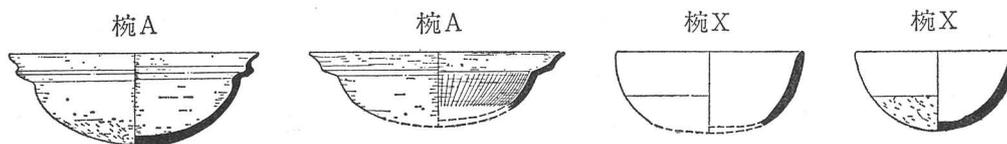


Fig. 14 SD6030下層出土の碗

調整し、縁部内外面はハケメ調整にナデ調整を加えて平滑にしあげている。ハケメの方向は外面ではタテ方向、内面ではヨコ方向である。赤褐色を呈し、胎土に細かい砂粒を多く含む。頂部径 4.9 cm, 器高5.0 cm, 縁部裾径12.0 cm。

g 高杯 (PL. 15, Fig. 15)

下層からは18点の高杯が出土した。そのうち12点は高杯Aで、その他に6種6点がある。

高杯A(34・35) やや中脹らみの円柱状の脚柱部に直線的にひろがる裾部のつく脚部と、平らな底部に外傾する口縁部のつく杯部からなる高杯で、胎土の精良な精製品である。杯部外面の底部と口縁部の境は屈折して明瞭な稜をなし、口縁端部はわずかに外反する。杯部の内外面はハケメ調整を入念に施し、さらにヨコ方向の細いミガキを加える。脚柱部の内面はシボリ痕跡をかるくナデ消したものと、ヨコ方向のケズリ調整を施すものがある。外面はタテ方向のケズリで調整したのち、ナデで整え、さらにヨコ方向のミガキを施す。脚裾部は内外面ともナデ調整でしあげる。杯部は、平坦につくった脚部上端面に刻み目を入れ、その部分に粘土をかぶせるようにして成形している。脚部内面上端に棒状工具で下方から浅く刺突した痕跡の残るものが1例、脚部上端に刻み目を施さず、凹形にくぼませて杯底部を受け入れるものが1例ある。灰褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。口径 14.7~17.4 cm, 杯部深さ 5.0~5.1 cm。

高 杯 A

その他の高杯(28~33) 28は平らな底部に外傾する口縁部のつく比較的小型の杯部と、外反して大きく広がる脚部からなる。脚部の中位に円形の透し孔があき、上下2段に各3孔を千鳥に配している。口縁端部は分厚く丸く、脚端部はうすく丸い。口縁部は内外面をヨコナデ調整したのちタテ方向の粗いミガキ調整を施す。脚部内面は上半部をヨコ方向のケズリで、下半部をヨコ方向のハケメで調整し、外面はハケメ調整の上にタテ方向の緻密なミガキ調整を施す。黄褐色を呈し、胎土中に砂粒が多い。口径12.6 cm, 器高10.7 cm, 杯部深さ 3.8 cm, 脚裾径 16.8 cm。29はわずかに内彎する底部に外傾する口縁部のつく杯部だけをのこす破片である。口縁端部は外反し、うすく丸くおわる。底部内外面をナデ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。底部外面中央には脚部上端につめられた突起が剝離した状況でのこる。突起は断面逆台形で下面の中央に直径3 mm, 深さ2 mmの小円穴がある。灰褐色を呈し、胎土中に細かい砂粒が多い。口径13.8 cm, 杯部深さ3.8 cm。口縁部外面上半部の一部に小さい黒斑がある。30はやや下方にひろがる円柱状の脚柱部に大きくひろく裾部をもつ脚部と、平らな底部に外傾する口縁部のつく杯部からなる。杯部と口縁部との境の屈曲部位の外面は稜をなす。全体にうすく、口縁端部、脚裾端部ともに丸くおわる。杯底部内面をナデ、口縁部内面をハケメで調整し、口縁部内外面はヨコナデでしあげる。脚柱部内面は不調整でシボリ痕跡がのこる。脚裾部内面は

高 杯 X

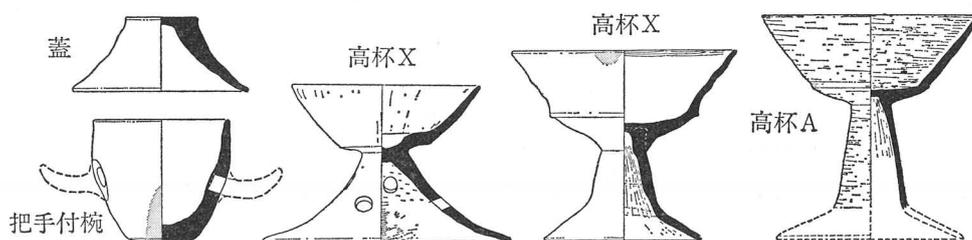


Fig. 15 SD6030下層出土の把手付碗・蓋・高杯

第IV章 遺物

ハケメで整えたのちナデ調整を施す。脚柱部外面はタテ方向に細かくヘラナデを行い、裾部外面とともにナデ調整でしあげる。出土の際に脚部と杯部は剥離していた。杯底部中央の脚部に接する部分は厚さ3mmとうすく、このことから脚部を成形したのちに、継ぎ足すようにして杯部を成形したことがわかる。淡褐色を呈し、胎土には粗い砂粒と微細な金雲母片を含む。口縁端部の一部に黒斑がある。口径15.3cm, 器高12.9cm, 杯部深さ5.0cm, 裾径10.7cm。31は脚部を欠く。杯部の形態はAに類似するが、やや大型で口縁部が外彎する。口縁部内外面および底部内面ともヨコナデで調整し、ミガキ調整は施さない。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口縁端部の一部分に黒斑がある。口径20.6cm, 杯部深さ5.7cm。32は平たい底部に外傾する口縁部のつく杯部と、下方にわずかにひろがる円柱状の脚柱部からなり、脚裾部を欠失する。杯部の底部と口縁部の境は屈曲し、外面は段をなす。口縁端部はわずかに外反し、うすく丸くおわる。口縁部内外面をヨコナデ、底内外面をナデで調整し、脚柱部外面はタテ方向のケズリ調整を施し、ナデ調整でしあげる。内面は不調整でシボリ痕跡がのこる。灰白色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。口径18.2cm, 杯部深さ4.6cm。33は平らな底部に直線状に外傾する口縁部のつく杯部と下方にやや大きくひろがる脚柱部からなり、脚裾部を欠く。杯底部と口縁部の境の屈曲部は稜をなさない。杯底部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整でしあげる。脚柱部外面は杯底部下端から続くタテ方向のケズリで整え、ナデ調整でしあげる。脚柱部内面にはヨコ方向のケズリ調整を施す。脚柱部の下端の三方に円形の透孔があく。暗赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。杯底部内面には点状の剥離痕が多数のこり、外面には全面にわたってススが付着している。口径15.3cm。杯部深さ4.0cm。

h 壺 (PL. 16, Tab. 3, Fig. 16)

壺として分類したものは61点あり、形態によりA~Fの6類に分けられる。

壺 A 壺A (40~44) 小さな平底をもつ丸い体部に外傾する口縁部のつく壺で、口縁部の比較的短いAa (40~42・44)と口縁部が長いAb (43)とがある。Aa 13点, Ab 2点。底部の形態は40~43が明瞭な平底であるのに対し、44はほぼ丸底の中央をわずかにくぼませた平底を呈する。Aa, Abともに口縁端部は丸く、口縁部内外面をヨコナデ調整で整えるが、Abではさらにタテ方向のミガキを加え、43の内面は正放射状に2段に施す。体部内外面の調整手法は個体により異なる (Tab. 3 参照)。Aaは茶褐色ないし暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。40・44の体部外面、41の外面全面と体部内面にはススが付着し、44の口縁部の外面の一部分と、対向する位置の内面の一部分に黒斑がある。

	体部外面調整	体部内面調整
Aa	40 ナ デ	ナ デ
	41 ハケメ + ケズリ (ヨコ方向・下半部のみ)	ケズリ(タテ方向)
	42 ナ デ	ナ デ
	44 ハケメ	ケズリ(上半部)・ナデ(下半部)
Ab	43 ナデ+ミガキ(ほぼ横方向)	ナ デ

Tab. 3 SD6030下層出土壺Aの体部調整技法

1) 器種の分類の問題点については後述する (p. 76)。

版に示した以外に、43と口径を等しくするが、長さが1.5倍の口縁部片が1点ある。43は外面が黒色、内面が暗褐色を呈し、胎土には微細な砂粒を含む。43の体部内面には白色の物質が付着している。口径11.7 cm、器高11.7 cm、体部最大径11.7 cmで、口径と体部径が等しい。

壺B (53・54) 球形に近い丸い体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺。15点あるが、ほとんどが小片で、全形のわかるのは1点にすぎない。口縁端部には、内側に肥厚して端面が内傾するもの(53)と、うすくつくり尖りぎみにおわるもの(54)とがある。前者の場合、頸部の屈曲はゆるやかであるが、後者は強くくびれており、かなりおもむきを異にする。口縁部はヨコナデで調整するが、53ではヨコナデの下にハケメ痕跡が明瞭にのこる。体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整で整える。54ではケズリの方向はおおむねヨコ方向をとり、下半部に指頭圧痕がのこる。54の体部外面はナデ調整を施し、ハケメをほとんどすり消している。また口縁部外面にはタテ方向のミガキを約5 mm間隔に施し、これは体部上端付近まで連なる。53は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。内面には全面にススが付着している。口径16.9 cm。54は灰褐色を呈し、胎土は比較的精良で、細砂粒を含む。口縁部外面の一部と体部下半部と底部外面にはススが付着する。口径18.0 cm、器高31.1 cm、体部最大径22.9 cm。

壺C (45・46) 平底のやや細長い体部に外反する口縁部のつく壺で、体部の最大径は中位よりやや下位にある。4点。器面調整は45と46とで異なる。45は口縁部内外面をヨコナデ調整したのち、外面にはタテ方向のミガキを加え、内面には左下り斜め方向のミガキを部分的に施す。体部外面には左下り斜め方向のミガキを全面に施す。内面は上半部をヨコ方向の粗略なケズリで調整し、下半部はナデ調整で平滑にしあげる。底部外面は不調整で、木葉圧痕がのこり、凸面をなす。黄褐色を呈し、体部外面の下半から底部にかけて黒斑がある。口径9.9 cm、器高16.4 cm、体部最大径14.8 cm。46は口縁端部を欠くが、口縁部内外面にタテ方向のハケメ調整を施し、外面にはナデ調整を加える。体部外面にはタテ方向のハケメ調整を施し、下4分の1の範囲はナデでハケメをすり消している。体部内面は上半部をヨコ方向、下半部を斜め方向のケズリで整えるが粗略であり、器面の2ヶ所に水平方向の粘土接合痕跡がのこる。底部内面にはハケメ痕跡がクモの巣状にのこり、底部外面は凹面につくられる。淡い黄褐色を呈し、

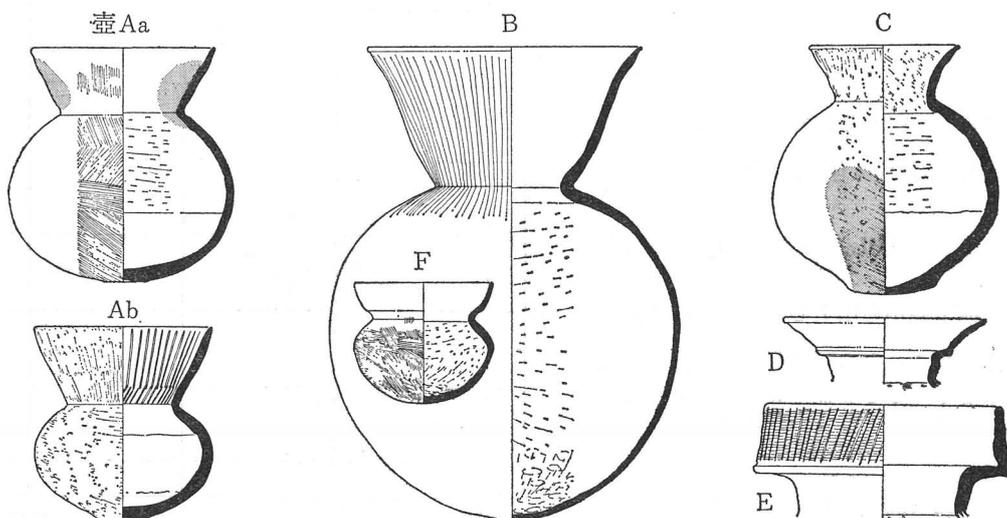


Fig. 16 SD6030下層出土の壺

第IV章 遺物

胎土に砂粒を多く含む。口径12.7 cm (推定), 器高21.2 cm (推定), 体部最大径16.1 cm。

壺 D (47~52) 外傾度の強い二重口縁をもつ壺で、口縁部および頸部の破片が8点ある。口径13.3 cmの小型品(50)と、19.8~27.9 cmの大型品とがある。口頸部中ほどの屈曲部の形状には断面三角形状にわずかに突出するもの(47~50)と、下方に強く突出し、突帯状を呈するもの(51・52)とがあり、いずれも口縁端部は弱く外反するが、48・50では肥厚させて丸くおさめる。口頸部の内外面はヨコナデで調整し、頸部の外面にタテ方向のハケメを顕著にのこすもの(47)、内面に斜めおよびヨコ方向のハケメを残すもの(48)、それに口頸部内面にタテ方向のミガキを加えるもの(52)が各1例ある。黄灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。

壺 E (55) 屈曲部以上が内傾する二重口縁の壺で、2点ある。55は頸部以上をのこす破片。屈曲部位は外方に突出し、断面方形を呈する。口縁部の内外面をヨコナデ調整し、外面にはヨコ方向、ついでタテ方向のミガキを緻密に施す。頸部外面はタテ方向のケズリで整え、ナデ調整でしあげる。体部内面は上端部分をとどめるだけであるが、ヨコ方向のケズリで調整している。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径15.0 cm。

壺 F (38・39) 肩の張った扁平な球形の体部に内彎する口縁部をつく小型壺で14点ある。口縁部は一樣にうすく、端部は丸くおわる。口縁内外面をヨコナデ調整、体部外面をハケメ調整で整え、体部内面はケズリ調整でうすくしあげる。底部内面には小範囲であるが指押え痕跡がのこる。体部内面の上半部をケズリによらずナデ調整でしあげるものが1例(39)ある。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。胎土、製作技法とも甕Aに類似するが、表面にススの付着はみとめられない。38は口径9.1 cm, 器高7.9 cm, 体部最大径9.2 cm。

壺 X その他の壺(36・37) 36は小型の平底壺。肩の張った丸い体部に直立する短い口縁部がつき口縁端部はうすく丸い。底部は不明瞭な平底をなす。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をナデで調整し、体部外面の下半部はさらにケズリで整える。暗褐色を呈し、体部外面の一部にススが付着する。口径6.7 cm, 器高5.6 cm。37はやや長手の丸い体部に外傾する口縁部がつく小型の壺で、底部を欠くが、平底かと思われる。口縁端部はうすい。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し、体部外面はケズリを施したのちナデ調整で整える。内面は板ナデで調整する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口縁部内面および体部内面の下半部にスス様のものが付着する。口径9.1 cm, 器高9.4 cm (推定), 体部最大径8.4 cm。

i 甕 (PL. 17・18, Fig. 17~20)

溝下層から出土した甕は222点にのぼる。これらの甕は形態と製作技法によりA~Iの9種に分けることができる。

甕 A (60~69) きわめて薄い器壁をもつ球形の体部に、外傾あるいはわ

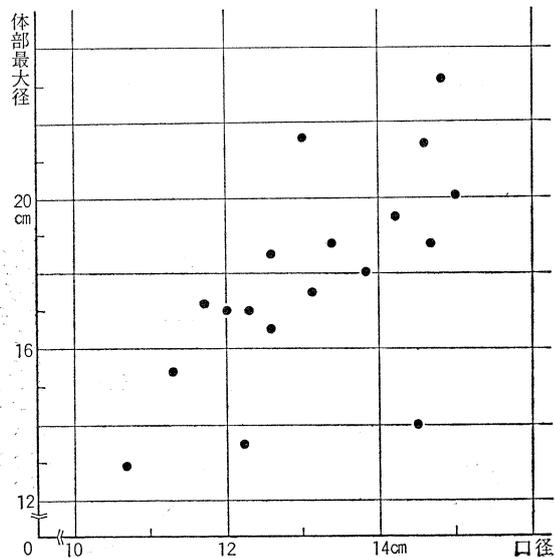


Fig. 17 SD6030下層出土の甕A法量

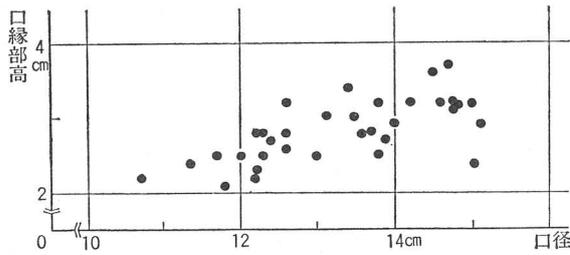


Fig. 18 SD6030下層出土の甕A口縁部法量

ずかに内彎するうすい口縁部のつく丸底の甕で、124点あり、下層出土の甕の6割近くを占める。口径10.7~15.0 cmをはかり、残存状態の良好な個体では口径13.0 cm、体部最大径18.0 cm以下の小型品と、口径14.0 cm以上、体部最大径18.0 cm以上の大型品とが

あるが、両者は明瞭に区分できるものではなく、法量的には大小ほぼ均等に分布している (Fig. 17)。口縁端部の形態には、折り返すことなくうすく丸くおさめるもの (量的には稀少) を含めて、折り返し (あるいは巻き込み) がごく弱く、端部がわずかに肥厚して丸くおわるもの (Aa) が60点、折り返しが明瞭で、端部が肥厚し端面が内傾する面をなすもの (Ab) が64点ある。全体的な傾向として、前者は小型品に多く、後者は大型品に多い。また口径の大きいものほど、口縁部がやや部厚く、口縁部高が高いという傾向がみとめられる (Fig. 18)。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整でしあげる。体部外面のハケメ調整は、全面に不定方向に施したのち上半部あるいは肩部にヨコ方向にていねいに施したものが目立つ。内面のケズリは底部周辺から体部上端よりやや下の位置におよび、頸部の屈曲点の下1~3 cmの範囲は不調整のままのこされている。ケズリの方向は下半部がおおむねタテ方向、上半部はやや傾斜した右上りナナム方向をとる。ケズリ調整は入念に施しており、体部の厚さは2~3 mmのほぼ均一の厚さにしあげている。底部内面には指頭および指腹の圧痕が明瞭に残り (PL. 27-4)、体部中位付近に達するものが多く、底部中央付近にはケズリ調整の施されないものもある。なお底部の形態には62のようにやや尖り気味のものもわずかにあるが、ほとんどはほぼ完全な丸底であり、とくに63・65は体部下半部の断面形が同大の正円弧を呈している。胎土には砂粒を多く含み、体部外面の全面、あるいは肩部以下には例外なくススの付着がみられる。

甕B (70~72) やや長胴の体部に外傾ないしわずかに内彎する口縁部のつく丸底の甕で14点ある。製作技法は基本的には甕Aに共通するが、器壁がより厚く、口径13.9~16.2 cm、器高22.3~27.5 cm (推定) で、小型の製品がない。口縁端部は内側に厚く肥厚し、端面は内傾する。器壁はとくに71では厚く、体部中位付近で8~9 mmをはかる。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面はハケメ調整、内面はケズリで整える。ケズリの方向は70では全面にわ

甕 B

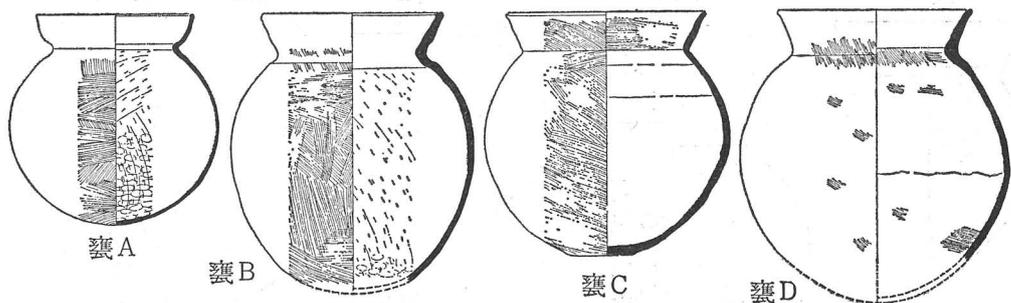


Fig. 19 SD6030下層出土の甕-1

第IV章 遺物

たって左上りの斜め方向, 70では右上りの斜め方向をとる。底部内面には指頭圧痕がのこるが, その範囲は甕Aより狭く, 底部周辺に限られる。胎土は砂粒を多く含み, 71の体部外面上半部には黒斑がある。また70・71とも体部外面の肩部以下にススが付着する。

甕 C (77・81~83) 肩の張った丸い体部に外反する口縁部につく平底の甕。34点あり, 口径13 cm, 器高14 cm 前後の小型品(Ca: 77など7点)と, 口径15~18 cm, 器高19 cm 前後の大型品(Cb: 81~83など27点)とがある。口縁端部には, うすく丸くおわるもの(77・83)とやや角張り, 端面が外傾する面をなすもの(81・82)があり, 小型品はいずれも前者の形態をとる。口縁部の調整には内外面ともハケメ調整でしあげるもの(77・82), 内外面をヨコナデ調整するもの(81~83)の他, 外面をヨコナデ, 内面をヨコ方向のハケメで調整するものもある。体部外面はすべてハケメ調整によるが, 大型品ではさらに下半部にケズリ調整を加える。体部内面の調整にはナデ調整を施すもの(77・81・82)が多いが, ケズリ調整で平滑に整えるものがある(83)。83は口縁部内面と体部外面上半部にヨコ方向の粗いミガキを加える。体部外面にはすべての個体に例外なく, ほぼ全面にススが付着する。

甕 D (73・74・78) 丸い体部に外反する口縁部につく丸底の甕。4点。口径15 cm 前後の大型品(73・74など3点)と口径9.5 cmの小型品(78)があり, 大型品はやや胴長の体部をもつ。いずれも口縁部内外面はヨコナデで調整するが, 体部の器面調整は個体差が著しい。73は体部上半部が残存するが, 外面をナデ, 内面を斜め方向のケズリで調整する。74は底部を欠くが, 体部外面をハケメ調整したのちタテ方向の入念なケズリ調整を施す。内面はハケメ調整を施し, ナデでしあげるが, やや粗略で, 体部中位に水平方向の波状の粘土接合痕が一条みられる。78は小型品で, 口縁部が比較的短い。完形品であり, 体部外面はケズリ調整でととのえたのちナデでしあげる。内面はケズリを施し, 弱いナデ調整を加える。ケズリの方向は下4分の1の範囲はタテ方向, 以上の部分はヨコ方向をとる。73は体部外面の下半部分に, 74・78は外面全面にススが付着している。

甕 E (84) やや細身の丸い体部に外傾する口縁部がつく甕。底部は先端の丸い尖底をなす。口縁端部は丸くおわる。3点。口縁部内面はヨコナデ調整, 外面はタテ方向のケズリ調整でしあげる。体部外面は傾斜の強い左下りのタタキ調整を施し, 中位付近のみケズリで整える。内面の調整は器面がほとんど剥落しているため明瞭ではないが, ナデ調整によるものとみられる。赤褐色を呈し, 体部外面下3分の1にススが付着する。口径14.2 cm, 器高20.7 cm (推定)。

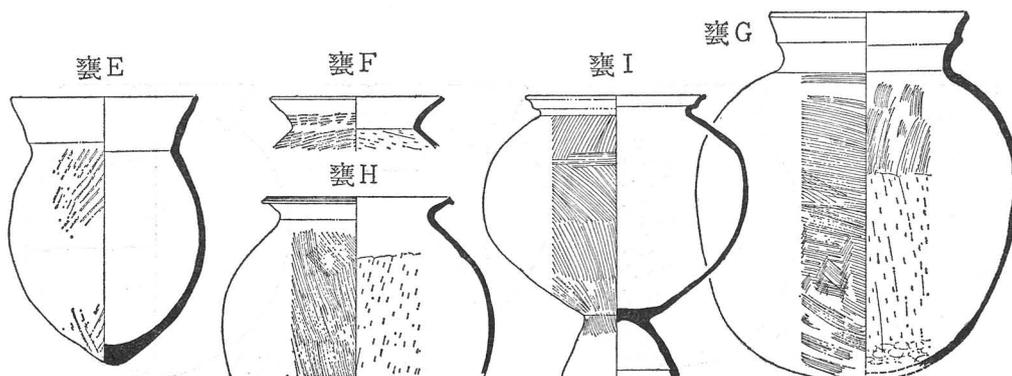


Fig. 20 SD6030下層出土の甕一2

甕 F (85) 口縁部と体部上端をのこす小片が1点ある。口縁部はわずかに外反し、端部が上方に鋭く突出する。口縁部内外面をヨコナデで整え、体部外面には目の細かいタタキ調整を施す。このタタキ目はわずかに左下りで口縁部外面下半部におよんでいる。体部内面はケズリで調整する。ケズリはヨコ方向におこない、体部上端におよぶため、口縁部の屈曲部分の内面は鋭い稜をなす。橙褐色を呈し、外面にはススが付着する。口径13.0 cm。 甕 F

甕 G (56~59, 75, 76, 93) やや長胴の体部に屈曲して立ち上る2重口縁のつく甕。11点。口縁部上半部分は直立あるいは外傾するが、内傾するものが1点(56)ある。口径36.8 cm の大型品(93), 15 cm 前後の中型品(75, 76など5点), それに7.4~11.3 cm の小型品(56~59など5点)がある。口縁部の屈曲部の外面は稜をなし、断面三角形の突帯がめぐるが、とくに小型品のうち口縁部上半の外傾するものには鋭い稜がつく。75は明瞭な稜をなさない。口縁端部の形態は、大型品はわずかに内傾する平坦面で、中型品では、75は中央がくぼむ面をなし、76は上方に突出してうすくおわる。小型品ではうすく丸いもの(56, 57, 59)のほかに外傾する狭い面をなすものがある(58)。口縁部内外面はヨコナデで調整し、小型品の中には外面にタテ方向のミガキを加えるものがある(58・59)。体部外面は、ほとんどが上端部分のみをとどめる破片であるが、ヨコ方向のハケメ調整を施し、内面はヨコ方向のケズリで調整する。ほぼ完形に復原しうる76では外面の全面にわたっておおむねヨコ方向のハケメ調整を施す。内面には下半部にタテ方向のケズリ調整を施し、上半部のケズリのおよばない部分にはタテ方向のハケメがのこる。また底部内面には指押え痕跡がのこり、炭化物が付着している。57, 59, 93の外面にはススが付着し、93では口縁部から体部上端にかけての一部分に黒斑がある。なお、75は比較的胎土が精良で、色調も他が灰褐色ないし淡褐色を呈するのに対し橙褐色を呈する。また体部上端に2列の竹管押圧文を施すなど異なった様相をみせる。 甕 G

甕 H (79・80) 2点あるが、いずれも破片で全形を復原しうるものはない。口縁部は短く外反し、端部が外傾する幅広い面をなす。端面には2~3条の浅い沈線がめぐる。口縁部内外面はヨコナデ調整し、赤褐色を呈する79では残存している体部内面の上端部分にケズリ調整の痕跡がみとめられる。80は体部外面にハケメ調整を施し、内面はケズリで調整する。ケズリは右上りの傾斜の強い斜め方向をとり、ケズリ調整のおよばない上端約2 cm の範囲は不調整で、指押え痕跡がのこる。黄褐色を呈し、体部外面にススが付着する。口径14.0 cm。79は口径15.0 cm。 甕 H

甕 I (86~92) 肩の張りの強い丸い体部に、S字状に屈曲する短い口縁部のつく台付甕である。口縁部の屈曲が強く、端部をうすく丸くつくるIa(88~92)と、屈曲が弱く、端部が外傾する面をなすIb(86・87)とに分けられる。Iaが23点、Ibが6点ある。Iaには口径14 cm, 器高22 cm 前後の大型品(90~92), 口径11 cm, 器高18 cm 前後の中型品(89), 口径7 cm, 器高12 cm 前後の小型品(88)の3者がある。いずれも口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をナデで調整し、口縁部と体部の接点であるくびれた部分の外面には沈線が1条めぐる。外面のハケメ調整は、肩部以下に強い傾斜をとる方向に施したのち肩部以上に施し、さらに両者の接する部位に水平方向に施すものがほとんどであるが、水平方向のハケメを先に施したのちに肩部以上のハケメ調整するものが1例(92)ある。体部の器壁はきわめて薄く、中位付近で2 mm前後をはかるが、器面は甕Aなどに比べると、内外面ともに凹凸が著しい。台 甕 I

第IV章 遺物

脚部は下端が内側に肥厚している。内外面をナデで調整し、外面の上半部には体部のハケメ調整がおよんでいる。黄灰色ないし灰褐色を呈し、外面にはススが付着するが、台脚部には全くみられず、火熱による器面の変質も少ない。また90では体部の下端約3 cmの幅の範囲にはススがみられず、体部内面の上半部には黒色の炭化物が固着している。90の底部外面（台脚部内面）には黒斑がある。

Ib はすべて小片で全形のわかるものはない。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をタテ方向のハケメ、内面をナデで調整する。体部外面のハケメの目はIaより粗く口縁部と体部の接点に沈線はない。黄褐色ないし茶褐色を呈し外面にはススが付着する。口径14.2~15.2 cm。

B SD6030 上層出土土器 (PL. 19~24, Fig. 21~27)

SD6030 上層からは456点の土器が出土した。須恵器2点を除くとすべて土師器である。もっとも多く土器を出土したのはⅡ砂層とⅠ黒層で、大半を占めている。出土位置は北区で54点、南区が402点となっている。なお須恵器はⅠ黒層から出土した。

i 土師器 (PL. 19~24, Fig. 21~26)

土師器の器種は小型丸底壺、椀、大鉢、甗、高杯、壺、甕、小型器台形土器がある。このうち高杯が291点で過半を占めており、ついで甗97点、壺27点、小型丸底壺12点となっている。下層との比較では器台が皆無であること、小型丸底壺と甗の数が減少していること、鉢と甗が加わっていることなどがあげられる。

a 小型丸底壺 (PL. 21, Fig. 21)

小型丸底壺はあわせて12点出土しており、B・Cの2種にわけられる。

小型丸底壺 B

小型丸底壺B (144) 半球形の体部にわずかに内彎する長い口縁部のつくもので、1点だけであるが、完形に復原できる。口縁部高は器高の2分の1にみたく、口径は体部最大径よりわずかに大きい。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面と体部上端付近の内外面をヨコナデで調整し、以下の部分の内外面はケズリで整える。明橙色を呈し、胎土は精良である。口径8.3 cm, 器高6.4 cm, 体部最大径7.1 cm。

小型丸底壺 C

小型丸底壺C (145~147) 扁球形の体部に外傾する口縁部のつく小型の壺。口径7.9 cm, 器高8.2~8.6 cm, 体部最大径8.7~9.9 cmで、口径は体部径よりやや小さい。11点。口縁端部はうすく丸くつくる。口縁部内外面をヨコナデで調整し、145の体部外面はヨコ方向のハケ

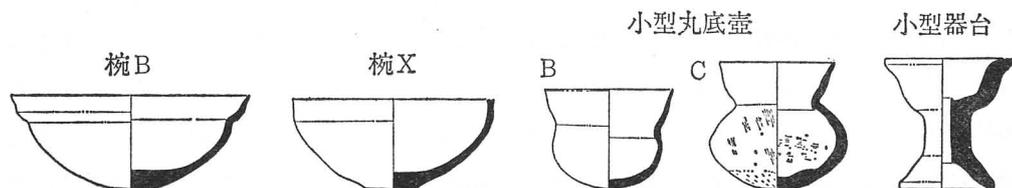


Fig. 21 SD6030上層出土の小型丸底壺・椀・器台形土器

メで調整, 147 ではナデ調整を施しているが, 146 ではほぼタテ方向のハケメ調整にナデ調整を加え, また底部にケズリ調整を施している。体部内面は145がナデでしあげるのに対し, 146では下半部にヨコ方向のハケメ調整を施している。145の底部内面にはなだらかな凹凸がみられ, 炭化物が付着する。146の底部内面は粘土紐を巻きつけた痕跡がそのままの状態でのこる。全体的に器壁が部厚く, 製作は粗略で, 胎土には粗い砂粒を多く含む。147の体部外面にはススが付着している。

b 椀B (PL.19, Fig.21)

椀B (94) 浅い半球形の体部に2段に屈曲する短い口縁部のつく器で, 底部は小さな平底をなす。1点。類似した形態を示す下層出土の椀Aに比べると器壁が厚く, 口縁部の屈曲がゆるやかである。口縁部内外面をヨコナデ調整で, 体部内外面をナデ調整で平滑にしあげる。明褐色を呈し, 胎土に砂粒を多く含む。口径15.3 cm, 器高 5.8 cm。 椀 B

c その他の椀 (PL.19, Fig.21)

椀X (95~100) 95は口縁部が外傾する浅い器で底部を欠くが, ゆるやかな凸面になるのであろう。口縁部内外面はヨコナデで調整し, 底部との境の内面はかすかな稜をなす。褐色を呈し, 胎土は粗いが砂粒を含まない。口径約15 cm, 器高約 5 cm。96は丸底の椀で口縁端部が外反する。器表面の剝落が著しいため器面調整法は不明瞭であるが, 外面にはハケメ調整痕跡がのこり, 内面はナデ調整によるものとみられる。橙褐色を呈する。口径13.2 cm, 器高5.5 cm。97は小さな平底と内彎する口縁部からなる椀。口縁端部は水平面をなし, 端面中央がわずかに凹む。口縁端部近くの内外面をヨコナデで調整し, 以下の部分をナデ調整でしあげる。内面は橙褐色, 外面は灰褐色を呈し, 胎土に砂粒を多く含む。口径13.0 cm, 器高5.8 cm。98・99は半球形の小型の器。口縁端部近くの内外面をヨコナデで調整し, 以下の内面と底部外面を粗いケズリで整える。褐色を呈し, 胎土に多くの砂粒と赤褐色の軟質微粒を含む。98は口径9.0 cm, 器高 4.4 cm。99は口径 7.2 cm, 器高 3.5 cm。100は薄い器壁をもつミニチュアの器。外面は不調整で, 内面に弱いナデ調整を施す。灰褐色。口径 4.3 cm, 器高 2.7 cm。 椀 X

d 小型器台形土器 (PL.19, Fig.21)

小型器台形土器 (101) 小椀状の受部をもつもので, 脚部は円柱状の脚柱部に直線的にひろがる裾部がつく。受部の上端部は強く外反し, 端面はわずかに内側に傾斜する平坦面をなす。脚柱部芯には直径 1.3 cm の筒状孔が貫通し, この貫通孔の受部側の周囲には低い粘土の突出がみられる。棒状工具を軸芯にして脚柱部を成形し, 上方に引き抜いたのであろう。外面にヨコ方向のハケメ調整を施したのち内外面ともナデ調整でしあげる。なお, 口縁端面のナデ痕跡は他の部位に比べて粗略であり, 剝離面かとも考えられる。明褐色を呈し, 胎土に多くの砂粒を含む。外面には部分的に赤色顔料が付着している。受部口径 8.3 cm, 器高 8.4 cm。 小型器台形土器

e 大鉢 (PL.22)

大鉢 (175・176) 小さな平底と, 内彎しつつひろがる口縁部からなる大型の深鉢。4点あ 大 鉢

第IV章 遺物

るが、全形のわかるものは1点だけである。175は口径44.6 cm, 器高36.5 cmをはかる。口縁端部約4 cmの部分は肥厚し、わずかに外反する。この部分の内外面をヨコ方向のハケメ、以下の口縁部外面を斜め方向のハケメ、内面をナデ、底部内面をハケメで調整し、底部外面は不調整である。成形に際しては、まず底から5 cmの高さまでを作る。内面に左まわりヨコ方向のハケメ調整(クモの巣状)を施したのちナデで整え、上端面を強く内傾する面を作る。半乾燥の状態にしたのち、幅7~8 cmを1単位として5~6段にわたって粘土帯を積み上げた痕跡が内面器壁にのこっている。外面のハケメ調整は、まず下3分の2の範囲に下から上方向に施したのち、上3分の1の部分に上から下方向に施しており、下位のハケメ調整時は器体を倒置していたと考えられる。ハケメ条痕の間隔は甕などに比べると粗く、幅2.5 cmにつき9条である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。176では、高さ3 cmまでの部分を成形し、内面をハケメ、外面をナデで調整したのちに粘土帯を積み上げるという175と同様の工程がみとめられる。但しハケメ条痕はより細かく、内外面ともヨコ方向あるいは斜め方向に施されている。

f 甌 (PL.24)

甌 (190) わずかに下すぼまりの円筒形の体部にやや凸面になった平坦な底部がつく。底面には蒸気孔が穿たれており、体部の中位に一对の把手がつく。口縁端部はつよく外反し、端面は外傾する平坦面をなす。把手は基部がのこるだけであるが、角状のものであったとおもわれる。この基部には上下方向の貫通孔の痕跡がみとめられる。把手と体部との接合は、体部壁に円孔を穿ち、把手を挿し込み、内外の周囲に粘土を補充している。内面はさらにケズリ調整で整えられていることから、内面の器面調整以前に把手の着装がおこなわれたことがしられる。蒸気孔は底面の中央に円形孔、その周囲に5つの楕円形孔を配する。口縁端部の内外面をヨコナデ調整し、以下の外面をタテ方向のハケメ、内面をケズリで調整する。内面のケズリ調整は下3分の2の範囲は下から上のタテ方向、以上の部分はやや左上りの斜め方向をとる。淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含むが緻密である。外面の口縁端部付近に黒斑がある。口径22.2 cm, 器高23.4 cm。このほかに13個体分の破片と、角状把手6点があるが、角状把手のなかに、貫通孔の施されているものはない。

g 高杯 (PL.19・20, Fig.22)

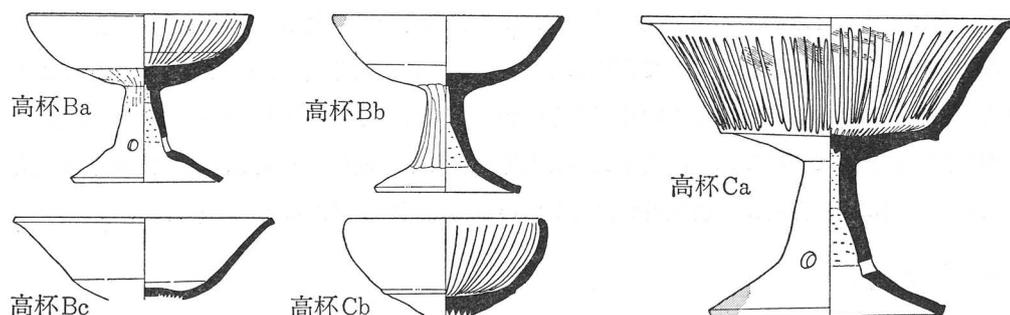


Fig. 22 SD6030上層出土の高杯

SD6030 上層からは 291 点におよぶ高杯が出土した。これは杯部だけで算定した数値で、同数に近い脚部のみの破片もある。大半を占める高杯 B・C とその他の高杯とに分けられる。

高杯 B (102~121) わずかに内彎する底部に口縁部がつく杯部と脚部とからなり、脚部は下端がややひろがる脚柱部からゆるやかに大きくひろがる裾部がつく。杯部で数えると 199 点あり、そのうち脚部とともにのこるのは 14 点にすぎない。杯部口縁部の形状により、内彎する Ba、直線的に外傾する Bb、端部付近が外反する Bc の 3 種に細分できる。

高杯 Ba (102~108) は杯部の口縁部が内彎するもので、口縁端部は平坦面をなす。この端面は水平であるものが多いが、やや外傾するものや内傾するものがあり、口縁端部付近の内彎度の強いものほど内傾が強くなる傾向がみられる。130 点あり、高杯 B の 65% を占める。口径は 13.2~16.4 cm (平均 14.6 cm) で、とくに 13.5~15.1 cm のものが多い。脚端部の径は 8.1~11.7 cm (平均 10.1 cm) で、9.0~10.9 cm に集中する。器高は 9.9~13.5 cm、杯部の深さは 3.5~4.7 cm をはかる。高杯 Ba はとくに形態的な斉一性が強い。杯部は内外面ともハケメ調整で整えたのち、底部内面をナデ調整で、口縁内外面をヨコナデ調整でしあげる。杯部内面に放射状のミガキを加えるものが約半数ある。脚柱部内面には、上半部に上方から、下半部に下方からヨコ方向のケズリを施すが、下半部にケズリのないものが脚部をのこす 12 例中 1 例あり、それには器面にシボリ痕跡がみられる。脚裾部内面はヨコ方向のハケメ調整を施したのち、タテ方向のヘラナデ調整を加え、さらに裾部外面を含めた全面をナデ調整によりしあげる。脚裾端部はほぼ正円形を呈し、端面はほぼ垂直面に削られている。脚部の中位の 3 方に径 0.8 cm 前後の円孔を穿つものが 12 例中 10 例ある。器体成形の手順としては、まず脚部をつくり、ある程度乾燥させてのち杯部を成形したものと判断される。杯部成形以前の脚部上端は開口しており、軟かい粘土塊を脚部上におしつけるようにして杯部の成形を始めているため、脚柱部内面上端には下方に突出する半球形の粘土の盛り上りがみられ (PL. 27-10・11)、その下面の中央には直径 2~4 mm の円穴がある。この小円穴は高杯 B・C のすべての個体に例外なくみられ、中には 2 度にわたり刺突した例もみられる (PL. 27-9) が、杯底部に貫通することはなく、また最奥部には半球状の小突起がのこる場合もある。灰褐色ないし淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。105・108 など 7 点の杯部外面には黒斑があり、杯部内面全面が黒色を呈するものが 1 点ある。残存状態の良好な個体が多いが、その中に杯部が著しく焼き歪んでいるものが 1 点ある。

高杯 Bb (109~114) は杯部口縁部がほぼ直線状に外傾するもので、51 点ある。口縁端部は丸い。口径 13.6~16.2 cm、器高 11.7~12.4 cm、杯部の深さは 3.7~4.7 cm をはかる。杯部の法量は高杯 Ba とほとんど変わらないが、杯部内面に放射状ミガキを施すものは少なく、観察可能な 42 点のうち 6 点にすぎない。脚部をのこすものは 2 点あり、そのいずれにも透孔がない。橙褐色ないし灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。杯部口縁部外面に黒斑のあるものが 4 点ある。109・110・113 は杯部内面全面が黒色を呈する。なお 114 は脚柱部上半が中空がなく、器面の色調も茶褐色を呈し、他とは若干異なった様相をみせており、別種のものとして考えるべきかもしれない。但し、脚柱部内面上端には高杯 B に共通する小円穴がある。

高杯 Bc (115~121) は 18 点であり、杯部口縁部が全体にゆるく外反するもの (115~119) と、端部付近が強くと外反するもの (120・121) とがある。口縁端部は前者が丸いのに対し、後者は

第Ⅳ章 遺物

外傾する面をなす。口径は前者が14.0～15.9 cm, 後者が17.2～18.5 cm と口縁端部の形態差に対応しているが, 杯部の深さは3.9～4.7 cm の間にある。製作技法は高杯 Ba・Bb に共通し, 杯部内面に放射状ミガキを施すものが2例ある。しかし, 口縁端部が強く外反するものにはミガキがない。橙白色ないし灰褐色を呈し, 胎土に砂粒を多く含む。118・119の杯部内面は光沢ある黒色を呈し, 117の口縁端部外面には黒斑がある。

高杯 Bの脚部と判断されるものが207点ある。この中には後述する高杯 Cbの小型品の脚部も含まれるであろうが, Cbの杯部は1点だけであるので, その脚部の数量も限られているとおもわれる。裾部径は8.6～11.7 cm (平均10.0 cm), 高さ(杯底部と接する部分の高さ)は5.5～7.2 cm (平均6.3 cm)をはかる。成形および調整技法については高杯 Baの項でふれたが, 脚柱部内面の下半部にケズリ調整を施さず, シボリ成形痕跡をそのままとどめるものが7点ある。また32点には脚部中位の三方に円形透孔がある。これらの相違は脚部の法量あるいは調整技法の違いに対応するものではない。脚裾部外面に黒斑のみられるものが7点ある。また32点には脚部中位の3方に円形透孔があく。

ヘラ記号 脚裾部内面に記号様の刻線のみられるものがある。刻線には「×」, 「<」, 「=」の3種があり(PL. 27-1～3), 平行線の例が最も多く9点, ×が6点, <が2点ある。いずれも透孔が穿たれ, 脚柱部内面下半部にケズリ調整を施す製品に限られる。

高杯 C 高杯 C(126～139) 杯部は平らな底部と, 稜を境に屈曲してひろがる口縁部からなり, 脚部の形態は高杯 Bと全く同じであるが, より大型である。口縁部の形態には, ほぼ直線状に外傾して端部付近が外反するCaと, 口縁部全体が内彎するCbとがあり, Caが85点, Cbが2点ある。

高杯 Ca 高杯 Ca(126～137)は口縁端部付近が外反するが, 外反の度合いが強く, 外反部分が水平に近くなるものとそうでないものがある。口縁端部は垂直に近い平坦面をなす。口径20.0～25.4 cm, 器高18.0～19.6 cm, 杯部深さ5.1～8.9 cm。脚部をのこすものは3点あり, 裾部径14.8～15.4 cm, 脚部高9.2～10.2 cmをはかり, 高杯 Bのおよそ1.5倍の法量をもつ。脚部の中位の3方にはいずれも円形の透孔を穿っている。杯部内外面はハケメ調整を施したのち, 底部内外面をナデ調整, 口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげるが, ナデが弱くハケメ痕跡を著しくとどめる例が多い。口縁部内外面および底部内面にミガキを加えるものがある。内外面ともにミガキを施すものが47点と約半数あり, 外面にだけ施すもの3点, 内面だけのもの11点, 内外面ともにミガキのないものが24点ある。ミガキの有無は口縁端部の外反度あるいはその他の形態的差異とは対応しない。内面底部のミガキはすべて放射状に施されるが, 口縁部のものにはいくつかの変化がある。下から上のタテ方向に1条ずつ独立するもののほか, 上下で反転しつつ連続するタテ方向のジグザグ状のミガキが多く施される。この違いの比率をみると, 内外面ともジグザグ状のもの, 外面がジグザグ, 内面が一条単独のもの, 内外面とも一条単独の調整がそれぞれほぼ同数ある。脚部の成形, 調整技法は高杯 Bと全く同じである。淡橙色ないし淡褐色を呈し, 胎土に細砂粒を多く含む。132など7点では杯口縁部外面に黒斑がある。

高杯 Caの脚部だけの破片が44点ある。裾部径が12.5～16.3 cm (平均14.1 cm), 高さが7.2～10.2 cm (平均8.2 cm)あり, 高杯 Bに比べると1.4～1.5倍の法量を示す。脚柱部下半部には例外なくヨコ方向のケズリ調整を施し, 脚部中位の3方に円形透孔のあるものは約3分の2をかぞえる。

高杯 Cb (138・139) 大型品と小型品が各1点ある。いずれも杯部のみの破片で、脚部を欠く。杯底部と口縁部との境の外側は断面三角形の低い稜をなす。大型品(139)は口径20.2 cm、杯部深さ8.9 cm。口縁端面は内側に傾斜する凹面をなし、端面内側にわずかに突出する。杯部内外面をハケメで調整したのち、ナデ調整でしあげ、さらに全面にミガキを加える。ミガキは内面では底部と口縁部とに分けて2段の放射状に施し、外面は底部に放射状、口縁部に斜方向のミガキを緻密に施す。外面は灰褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土は高杯 Cb より精良である。底部外面中央には下方から穿たれた小円穴がのこる。底部外面は摩耗した平坦面をなしており、脚部欠損ののち杯部のみを容器として再利用したものとおもわれる。小型品(138)の口縁端部は強く内彎し端面は丸い。底部外面中央の脚部折損面には小円穴がのこる。杯部内外面をハケメで整え、底面内外面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげ、口縁部内面には放射状のミガキを加える。橙白色を呈し、胎土は139に似て精良である。口径12.5 cm、杯部深さ5.2 cm。

高杯 C の製作技法は基本的には高杯 B と同じであるが、杯部成形に際して、高杯 B が連続して口縁部までつくりあげるのに対し、高杯 C の場合は杯底部を成形したのちある程度乾燥させてから口縁部を成形している。これは杯部の法量の差に対応したものと考えられる。また脚部と杯部の接合部分には下方から穿たれた小円穴が例外なくみられ、この点も高杯 B と共通するところである。

高 杯 X

その他の高杯(122~125・140~143) 上層出土の高杯の中には、大半を占める高杯 B・Cのほか、形態、色調、製作技法を異にする数点の製品がある。杯部をのこすもの3種4点と脚部だけの破片が4種4点をかぞえる。122は比較的狭い底部に外傾する口縁部のつく杯部のみの破片。口縁端部はうすく尖りぎみである。底部外面中央には脚部が剝離した凹部がのこる。このことから、閉塞した脚部上端に粘土を継ぎ足すことにより杯部を成形したことがわかる。杯部外面と外面の端部付近をヨコナデで調整し、外面の以下の部分をナデでしあげる。黒褐色を呈し、胎土は粗い。口径11.9 cm、杯部深さ4.4 cm。123は平らな底部に外傾する口縁部がつき、脚部は下端のひろがった円錐状の脚柱部から幅の狭い裾部が直線状にひらく。口縁端部はうすく、わずかに内方に巻き込み加減である。杯部内面をハケメ調整で整えたのち杯底部内面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげる。杯底部外面にはタテ方向のケズリ調整を施すが、このケズリは脚柱部外面上半部に及ぶ。脚柱部内面はヨコ方向のケズリで調整し、裾部内外面にはヨコナデ調整を施す。橙灰色を呈し、胎土は比較的精良である。杯口縁部外面の対向する2箇所には黒斑がある。口径13.7 cm、器高11.5 cm、杯部深さ3.6 cm。124は円盤状の底部に内彎する口縁部がつく杯部のみの破片で、口縁端部付近が強く外反し、端面は丸い。口縁部と底部の境には断面三角形の低い突帯がめぐる。杯部内外面をハケメ調整で整え、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげるが、内面のヨコナデは弱く、器面にヨコ方向のハケメ痕跡が顕著にのこる。底部外面中央には脚部上端の折損部分が残存しており、その内部には下方に突出した半球状の粘土塊がみられる。灰褐色を呈し、胎土に細砂粒を含む。口縁部外面には大きな黒斑がある。口径15.7 cm、杯部深さ6.4 cm。125の杯部は平らな底部に内彎してゆるやかにひろがる口縁部がつく。脚柱部は円筒状で上半部は中実である。脚裾部は直線状に強くひろがる。杯底部内面をナデ調整、口縁部内外面をヨコナデ調整でしあげ、杯底部外面はタテ方

第IV章 遺物

向のケズリ調整で整える。脚柱部内面はナデ調整，裾部内面はハケメ調整，脚柱部外面はタテ方向のケズリ，裾部外面はヨコナデ調整でしあげる。杯部の歪みが著しく，口縁部の一端が片口状に突出している。橙灰色を呈し，胎土に細砂粒を多く含む。口径14.6 cm，器高10.6 cm，杯部深さ 3.7 cm。140～143は脚部だけが残る。140は中空の脚部で，上端面はすり鉢状の剝離面をなし，中央に直径3 mmの小孔があく。外面にナデ調整，内面にヨコ方向のケズリ調整を施すが，とくに裾部内面はていねいに調整している。暗褐色を呈し，胎土は比較的精良である。裾部径11.0 cm，脚部高さ 6.8 cm。141は円錐状の脚部で下端近くが強く外反する。上端にはまるくくぼんだ剝離面をとどめる。内面上半部にはシボリ痕跡がのこり，下半部はヨコ方向のハケメ調整が施される。外面はタテ方向のハケメ調整を施し，ナデ調整でしあげる。橙褐色を呈し，胎土は比較的精良である。裾部径13.3 cm。142は他の高杯に比して小型の脚部で，中実の脚柱部と，円錐状に小さくひろがる裾部からなる。外面はタテ方向のヘラナデ調整でしあげ，内面はハケメ調整で整え，ナデ調整でしあげる。灰褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。裾部径 7.4 cm，脚部高 4.9 cm。143は中脹らみの中空の脚柱部に強くひろく裾部がつく。脚部上端は杯部との剝離面がのこり，中央に小孔のあくうすい閉塞粘土膜がある。脚柱部内面はナデ調整，外面はハケメ調整のちナデ調整でしあげるが，脚柱部外面上半部には数条の刺突痕列が斜め方向に施されている。明褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。裾部径10.6 cm，脚部高 7.5 cm。

h 壺 (PL.21, Fig.23)

上層から出土した壺は27点あり，A・B・G・H・Iその他に分けられる。

壺 A (153～158) 球形の体部に外傾する口縁部のつく壺で，下層出土の壺 Aaの形態に似る平底のものと，丸底で体部が扁球形を呈する Acとがある。Aa・Ac あわせて15点あるが，多くは小片で，明瞭に区別しうるのは Aa 2点(157・158)，Ac 4点(153～156)である。157は体部の一部を欠くが，小さな凹面の平底をもつ。体部内面はナデ調整を施し平滑にしあげる。口縁部内外面はヨコナデ調整したのち，小さきみなヨコ方向のミガキを加える。体部外面は上半部をヨコ方向のミガキ調整，下半部をヘラナデ調整でしあげる。暗褐色を呈し，表面にス

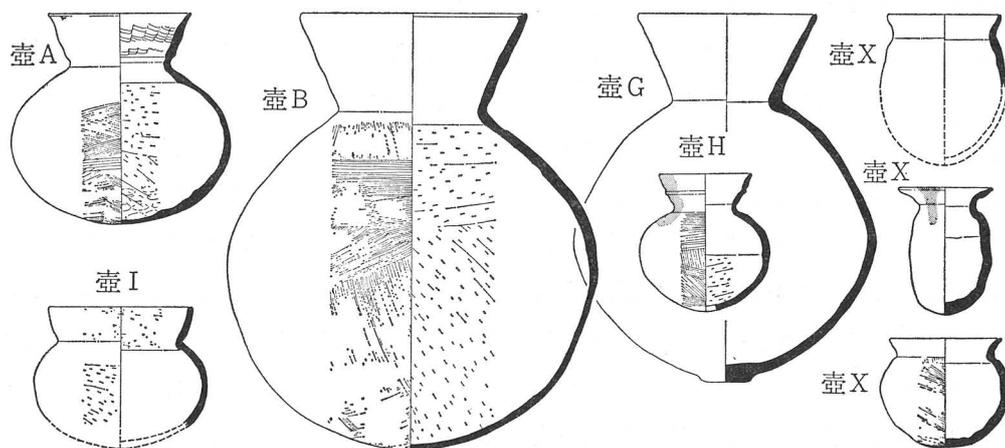


Fig. 23 SD6030上層出土の壺

1 土 器

の付着はみられない。口径11.1 cm, 器高12.0 cm(推定)。158は底部を欠く。口縁部内外面にヨコナデ調整を施し, 体部外面は全面をハケメ調整したあと下半部のみナデ調整を施す。体部内面は下半部をケズリ調整でととのえるが, 上半部は不調整で, 指押え痕跡がのこる。赤褐色を呈し, 胎土に砂粒を含む。体部外面にはススが付着する。口径11.5 cm。

壺 Ac の口縁部は下半部が肥厚しており, 端部はうすく尖りぎみである。内外面をヨコナデ調整で整え, 153・154では外面にタテ方向のミガキを加える。162では内面にナデはみられず, ヨコ方向の断続的なハケメがのこる。多くの例では口縁部下端の内面が凹形にくぼんでいる。体部外面はハケメ調整を施したのちナデ調整でしあげる。体部内面はおおむねヨコ方向のケズリで調整し, 156は底部に指頭圧痕が顕著にのこる。ケズリは粗く, 器壁の厚さは均一でない。154の体部外面にはススが付着する。

壺 B (164・165) 球形の体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺で, 2点ある。口縁端部は164が水平な平坦面であるのに対し, 165は内側に若干肥厚し, 端面は内傾面をなす。口縁部内外面はヨコナデ調整でしあげるが, 164にはハケメがのこる。体部外面にはハケメ調整を施す。ハケメの方向は上端付近でタテ方向, 以下の部分は斜め方向をとるが, 最後に肩部付近にヨコ方向に施している。体部内面は上半部をヨコ方向, 下半部を左上り斜め方向のケズリで調整する。165の底部外面にはススが付着する。164は口径16.5 cm, 165は口径17.7 cm, 器高34.6 cm。

壺 G (163) 下膨らみの丸い体部に外傾する長い口縁部のつく大型の壺で小さな平底がつく。1点。口縁部は先端に向けてうすくつくり, 端部は丸い。口縁部内外面はヨコナデで調整し, 体部は内外面ともナデ調整でしあげる。灰褐色を呈し, 体部の下4分の1の範囲にススが付着する。口径13.9 cm, 器高29.1 cm。

壺 H (159・160) 2点ある。160は球形の体部に外傾する長い口縁部のつく小型の壺で, 口縁部の中位外面にわずかな稜がめぐる。口縁端部はうすく丸い。底部中央に直径約2 cmの不整形円形孔があくが, これは焼成後に内側から穿ったものである。口縁部内外面はヨコナデ調整, 体部外面はハケメ調整で整える。体部内面には下半部にケズリ調整を施すが, 上半部は不調整で, 指押え痕跡をとどめる。赤褐色を呈し, 胎土は精良である。口径6.2 cm, 器高10.9 cm。159は口縁部の破片であるが, 160に比べると外面の稜がより明瞭で, 下層出土の壺Dにみられる二重口縁の形態に近い。灰褐色を呈する。口径10.0 cm。

壺 I (161・162) やや肩平な球形の体部に外傾する短い口縁部のつく広口の壺で, 2点ある。161の口縁部はわずかに外反するが, 162では内彎する。端部は丸い。この2点は形態的に類似しているが, 器面調整技法において著しく異なる。161は口縁部内外面をヨコナデ調整, 体部外面を弱いハケメ調整でしあげ, 体部内面にはヨコ方向のハケメ調整に, 斜め方向のケズリを加える。一方, 162は口縁部内外面をヨコナデ調整でととのえ, さらにヨコ方向のミガキ調整を施す。体部外面には弱いハケメ調整のちケズリ調整を施して平滑にしあげ, 内面はナデ調整で整える。2点とも淡褐色を呈し, 胎土に粗い砂粒を含む。161の口縁部外面には黒斑がある。口径は161が9.2 cm, 162が11.2 cm。

その他の壺 (148~152) 148は体部下半部を欠くが, 細長い体部に外傾する口縁部がつく小型の器。口縁部内外面ヨコナデで調整し, 体部外面はケズリ調整を施したのちにナデ調整で

第IV章 遺物

しあげ、内面はナデ調整で整える。淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径 9.2 cm。149 は浅い体部に外反する短い口縁部のつく広口の器で、底部を欠く。口縁端部は内側にわずかに巻きこみ気味につくる。口縁部内外面にヨコナデ調整、体部外面にはぼタテ方向の条痕の粗いハケメ調整、内面にケズリ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径 9.8 cm。150 はわずかに外傾する短い口縁部のつく小型の広口壺。口縁部内外面にヨコナデ調整、体部外面に粗いハケメ調整のちナデ調整を施し、内面は指でかき上げるようにして整える。底部外面は剥落しているが、丸底とみられる。茶褐色を呈し、胎土にわずかな量の砂粒を含む。口縁部から体部上半部にかけての外面に黒斑がある。口径 6.3 cm。151 は細長い体部に強く外反する口縁部のつく小型の器で、簡略な製作になる。口縁部内外面をヨコナデ調整、体部外面をハケメ調整のちナデ調整、内面を弱いナデ調整でしあげる。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径 7.2 cm, 器高 10.1 cm。152 は丸い体部に外反する短い口縁部のつく広口の小型壺である。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメで調整する。体部内面は上半部を弱いナデで整えるが、下半部には指押え痕跡が浅い凹部となつてのこる。黄灰色を呈し、外面全面にススが附着する。口径 8.7 cm, 器高 8.6 cm, 体部最大径 10.3 cm。

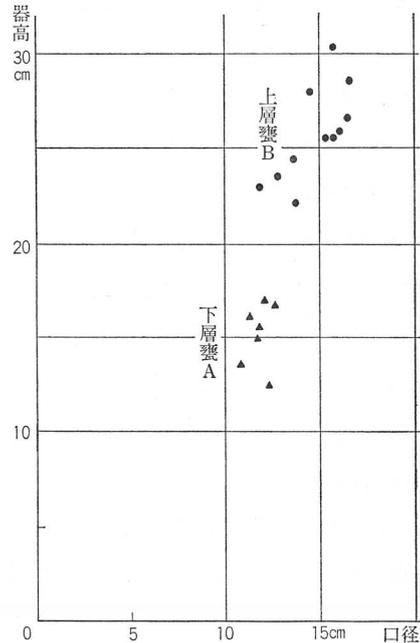


Fig. 24 SD6030 上層出土の甕A・B法量比較

i 甕 (PL. 22~24, Fig. 24~26)

上層からは97点の甕が出土した。A・B・C・D・G・H・Iがある。そのうち甕I(S字状口縁甕)についてはIbの口縁部片が2点あるが、形態、調整技法ともに下層出土品と同様であるので個々の説明ははぶく。

甕 A 甕A (166・167) 球形の体部に外傾あるいはわずかに内彎する口縁部がつく甕で、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。小片が多いが、口縁部で数えると17点ある。成形、調整技法は下層の甕Aに全く共通するが、166は体部下半部が若干歪んでいる。口径11.7 cm, 器高15.1 cm。

甕 B 甕B (178~189) やや長胴の丸い体部に、外傾ないしやや内彎する分厚い口縁部がつく甕

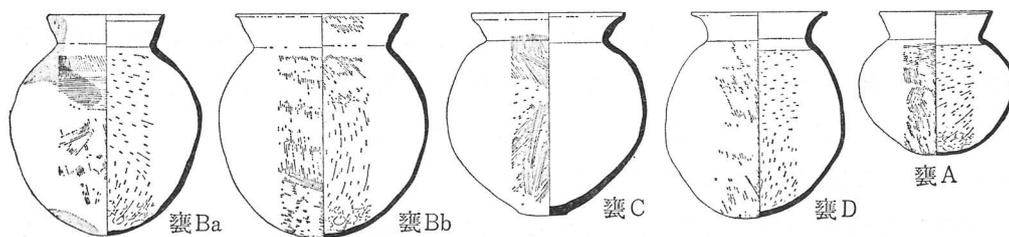


Fig. 25 SD6030上層出土の甕—1

で、口縁端部が内側に折り返されて肥厚するBa(178~183)と、折り返しのないBb(184~189)とに分けられる。Baが36点、Bbが14点ある。法量的に両者の間に差はない。口径11.3~19.8 cm, 器高23.1~30.4 cmをはかり、製作技法が共通する下層の甕Aにみられた小型品がなく、比較的大型品に限られる(Fig. 24)。Baには口縁部が内彎するものが多く、肥厚した口縁端部はほとんどの例が内傾面をなすが、外傾するものも少量ある(178)。Bbには端面が水平面をなすもの(184など2点)、内傾面をなすもの(185・189など9点)、水平面で外側の端部が外方に突出するもの(186)、上方に尖りぎみに突出するもの(187)、外傾面をなすものがあり、単に丸くおわるものはない。Ba, Bbともに口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。185は体部外面のハケメをナデ調整ですり消しており、186の体部内面には3分の1の範囲に斜め方向のハケメ調整痕が明瞭に残り、以下の部分にのみケズリ調整を施している。体部器壁は甕Aに比べて厚く、中位付近で5 mm前後から、厚いものでは9 mmをはかる。胎土には砂粒が多く含まれ、ほぼ例外なく体部外面には全面にススが付着する。但し、183では底部周辺にススが付着していない。また180・183の体部内面には黒色炭化物が固着している。

甕C(168) 小さな不安定な平底をもち、肩のはった丸い体部に、外反する口縁部のつく甕。9点あり、ほとんどが破片であるが、完形品が1点ある。168の口縁端部は上方に突出する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメで調整し、体部内面はケズリ調整で整える。黄褐色を呈し、体部外面の全面にススが付着する。口径15.0 cm, 器高21.3 cm。9点のうち6点は168に近い口径をもつが、3点は口径12 cm前後の小型品である。

甕D(170~174) 丸い体部に外反する口縁部のつく丸底の甕で、12点ある。体部は長胴であり、最大径は中位かやや下の位置にある。口縁端部はうすく丸くつくるが、174は外傾面をなす。口縁内外面をヨコナデ、体部外面をハケメで調整する。体部内面は170・171・173ではケズリ調整であるが、172・174はナデ調整で、器壁に粘土帯を積み上げた痕跡が明瞭にのこる。とくに174では、底部を欠くが、残存部分で、幅2.0~3.5 cmの間隔で7段につみあげて体部の成形をおこなったことが知られる。胎土には砂粒を多く含み、体部外面には例外なくススが付着する。また173では体部内面に炭化物が全面に固着する。口径10.6~15.2 cmをはかり、11 cm前後の小型品と、15 cm前後のものがある。170は口径10.9 cm, 器高12.8 cmの小型品で、口縁部の外反が弱く、体部は長胴の大型品とは異なり、やや歪んだ球形を呈する。また器面の色調も比較的黒ずんでいる。

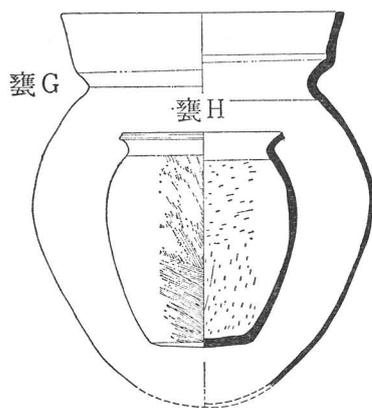


Fig. 26 SD6030上層出土の甕—2

甕G(177) わずかに外傾した屈曲する口縁部のつく丸底甕で、5点ある。177は口縁端部が水平をなし、口縁部の屈曲部の外面は明瞭な稜にならない。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。ケズリ調整は内面上半部がヨコ方向、下半部がタテ方向をとり、体部器壁は中位付近で3~4 mmと、比較的薄手である。灰白色を呈しており、器面の剝落が著しいためか、ススの付着はみられない。

口径21.0 cm。

- 甕 H 甕H (169) 肩の張りの弱い体部に、外反する短い口縁部のつく平底の甕で、底面はわずかな凸面をなす。1点。口縁端部は外傾する幅広い面で、中央がくぼむ。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。内面のケズリは下半部がタテ方向、上半部がヨコ方向をとる。茶褐色を呈し、外面全体にススが付着する。口径12.0 cm, 器高16.1 cm。
- 甕 X その他の甕 (191) 191は口径21.4 cm, 器高44.9 cm をはかる大型の甕。やや長胴の体部に外傾する口縁部がつき、底部は尖りぎみの丸底である。口縁部外面はタテ方向のハケメ調整を施し、ヨコナデ調整でしあげるが、内面はヨコ方向のハケメ調整を施すにとどまる。体部外面はハケメ調整、内面はケズリ調整で整える。体部外面の上4分の1の範囲ではナデ調整によりハケメが消されている。また外面の中位に粘土の継ぎ目が水平方向に一条の波状線としてのこっており、体部製作に際して、この段階で一旦作業を中断したことがわかる。内面のケズリ調整は下3分の2の範囲に施され、以上の部分は指で下から上方向に強くなでつけている。底部内面には指頭圧痕が顕著にのこる。茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。体部外面上半部から口縁部にかけての広い部分と、内面下半部との2ヶ所に黒斑がある。また体部外面下半部にはススが付着する。甕Bの大型品と考えられる。

ii 須恵器 (Fig. 27)

SD6030 上層から出土した須恵器は2点だけである。

- 甗 a 甗 (202・203) 202は小型甗 (はそう) の口縁部および頸部の小片で、口径9.1 cm, 頸部径4.3 cm, 口頸部高4.8 cmに復原できる。強く外反する頸部に外傾する口縁部がつつき、口縁部と頸部の境の屈曲部分にはゆるい稜線がめぐる。口縁端部は丸くおわる。全体をロクロナデで調整し、内面には自然釉がかかる。器表面は黒灰色を呈し、断面で見ると芯の部分は暗紫色を呈する。203も小型甗の口縁部の破片で、口径8.3 cm, 頸部径4.9 cm, 口頸部高2.9 cmである。口縁端部の内面には浅い凹線が施され、口頸部の中位に断面3角形の低い稜線がめぐる。稜線部以下の外面には櫛描波状文が施されている。櫛目は12本あり左から右方向に施文される。器面は一様に暗灰色を呈し、内面には斑状に自然釉がかかる。器壁の芯部は暗紫色を呈する。

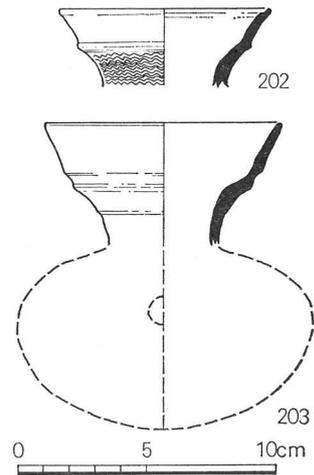


Fig. 27 SD6030上層出土の須恵器・甗

C SD8520 出土土器 (PL. 25・26, Tab. 4, Fig. 28~30)

6ACA 地区の調査で佐紀池から奈良時代の園池 SG8500 が検出されるとともに、下層からは古墳時代の溝 SD8520 が検出され、朝集殿下層溝 SD6030 下層よりやや古い段階に位置づけられる一群の土器が出土した。溝の堆積層は砂と粘土の互層で3層に細別されるが、随所に攪乱がみられるため、ここでは一括して扱った。なお、SD8520 出土ではないが、土層観察用トレンチから縄文式土器が出土しているので併せて報告しておく。

i 土師器 (PL. 25・26, Tab. 4, Fig. 28・29)

土師器には小型丸底壺、高杯、浅鉢、壺、甕があり、口縁部で識別しうる個体の総点数は92点をかぞえ、そのうち甕が74点 (80.4%) と大多数を占める。

a 小型丸底壺 Aa (301) 小片で、体部下半と口縁部上半を欠く。外面と口縁部内面にヨコ方向の細かいヘラミガキを施す。淡褐色を呈し、胎土は精良である。頸部径 6.4 cm, 体部最大径 7.3 cm。このほかに口径 9.4 cm に復原できる口縁部の小片がある。

b 高杯 (302・303) 302 は高杯 A の杯部である。杯底部外面をタテ方向のケズリで調整し、内外全面にヨコ方向のミガキを施す。灰褐色を呈し、胎土は精良。口径 17.0 cm, 杯部深さ 5.3 cm。303 は脚柱部の破片。下端の3方に透孔があく。外面をタテ方向のハケ、内面をナデで調整するが、内面にはシボリ痕跡がのこる。茶褐色を呈し、胎土は粗い。脚部上端径 3.9 cm。

c 浅鉢 (304) 浅い体部に外傾する長い口縁部のつく器。口縁端部は断面が矩形をなす。体部外面下半部をケズリで調整し、口縁部内外面と体部外面にヨコ方向に粗いミガキ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径 23.8 cm, 器高 9.1 cm, 口縁部高 4.3 cm。

d 壺 (305~308, 317・318) 壺には B・D・F・G などがある。

壺 B (317) 球形の体部に外傾する長い口縁部のつく土器で、底部はやや尖りぎみの丸底である。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整するが、口縁部内面下半部にはヨコ方向のハケメがのこり、体部内面にもケズリ調整以前のハケメ調整痕跡が部分的にのこる。ケズリの方向は上半部がヨコ方向、下半部はタテ方向をとり、きわめて平滑にしあげているが、底部には指押え痕跡がのこる。体部の器壁は 3 mm 前後の均一な厚さをもつ。灰褐色を呈し、外面の肩部以下にはススが厚く付着する。口径 16.8 cm, 器高 28.2 cm, 体部最大径 23.5 cm, 口縁部高 7.3 cm。

壺 D (306・307) 306・307 はいずれも二重に屈曲する口縁部をもつ壺であるが、その形状

器種名	個体数・比率
小型丸底壺 A	2 (2.2%)
浅 鉢	1 (1.1%)
高 杯 A X	1 } 4 (4.3%) 3
壺 A B D G X	2 } 1 } 11 (12.0%) 3 } 1 } 4 }
甕 A F G I J K X	48 } 3 } 74 (80.4%) 3 } 3 } 5 } 2 } 10 }
計	92 (100%)

小型丸底壺 Aa

高杯 A

浅 鉢

壺 B

壺 D

Tab. 4 SD8520 出土土器個体数

第IV章 遺物

はやや異なっている。306は体部の中位以下を欠く。頸部は直立し、屈曲部以上の口縁部上半は外反する。全面をヨコナデおよびナデで調整したのち、口縁部内外面と頸部外面に緻密なミガキ調整を施し、口縁端部内面と口縁屈曲部外面に櫛描波状文を、体部外面上端3cm幅の範囲には上から櫛描平行線文、波状文、平行線文の順に施文する。口縁屈曲部外面にはさらに竹管文を付した円形浮文を貼付する。黄褐色を呈し、一部に黒斑がつく。口径15.3cm、頸部径6.4cm、口頸部高5.0cm。307の口縁部は中位でわずかに屈曲し、屈曲部の外面には表面に左下り斜めの刻み目を入れた突帯が1条めぐる。また外傾する口縁端部外面にも刻み目を施している。口縁部外面をタテ方向のハケメ、内面上半部をヨコ方向のハケメで調整するが、外面上半部はヨコナデを加えてハケメをすり消している。口縁部内面下半部はヨコナデで調整する。体部外面はハケメで調整し、粗いミガキを加える。ミガキの方向は上端近くがヨコ方向、以下がタテ方向をとる。体部内面はナデで整えるが、1.0~2.0cmの間隔をおいた7条の粘土紐接合痕跡が水平方向にのこるが、体部下半部を欠く。黄褐色を呈する。口径16.9cm、頸部径9.9cm、口縁部高5.8cm。

壺 F (305) やや肩の張った球形の体部に外傾する短い口縁部のつく小型の器。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整し、外面肩部に蛇行する1条のヘラ刻線がある。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径7.6cm、器高8.9cm、体部最大径9.8cm、口縁部高1.8cm、頸部径5.6cm。

壺 G (318) 最大径がほぼ中位にある長胴の体部に外傾する口縁部のつくもので、口縁端部はうすく尖り、底部は小さい不安定な平底をなす。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデで整える。但し、ナデは微弱であり、器壁には2.0~3.8cm間隔の粘土(帯)接合痕跡が8~9条みとめられる。体部外面は器面の残存状態が不良で確認しがたいが、弱いハケメ調整にミガキ調整を加えているようである。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。口径13.8cm、器高32.6cm、体部最大径23.9cm、口縁部高5.3cm、頸部径9.8cm、底径4.4cm。

壺 X (308) 球形の体部にわずかに外反する直立口縁のつく広口の器で、底部は不明瞭な平底をなす。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデで調整する。体部外面は上端近くをハケメ調整で整え、肩部以下にケズリを施したのち、粗いミガキを加える。灰褐色を呈する。体部の中位の大部分を欠失している。口径12.6cm、器高18cm(推定)。

e 甕 (309~316, 319~332) 甕にはA・F・G・I・J・Kなどがある。

甕 A (320~327) 球形の体部に外傾する口縁部のつく丸底の甕である。口縁部は内彎ぎみにつくられているが、320だけは直線状をなし、端部は内上方に突出する。他の個体の口縁端

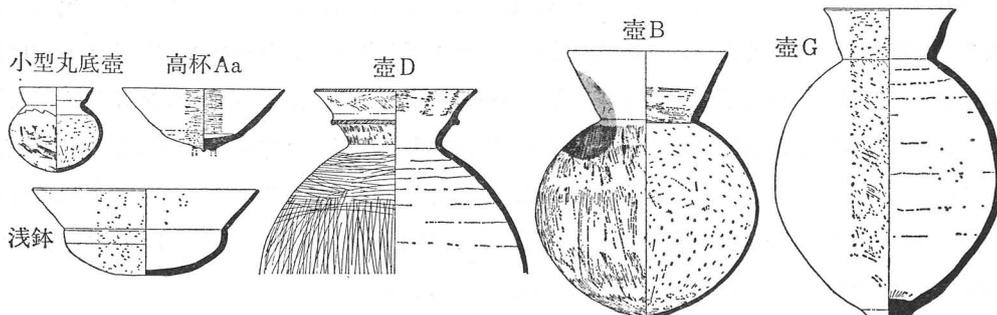


Fig. 28 SD8520出土の小型丸底壺・高杯・鉢・壺

部には折り返しが弱く端面がわずかに内傾するものと、端面が強く内傾するものがあり、前者は319・320・324・327など29点、後者は16点をかぞえる。口径は11.4 cm から15.7 cm の間にはほぼ一様に分布している。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。外面のハケメ調整の最後に体部の肩部から上端にかけてヨコ方向に念入りにハケメを施している。ハケメ条痕の間隔は1 mm 前後と非常に細かいが、323 は間隔が2 mm 程であり、他に比べるとやや広い。320 の口縁部内面にはヨコナデ調整以前のヨコ方向のハケメ調整痕がのこる。323・324の底部内面には指押え痕跡がのこり、323 では体部の下半部全体におよぶ。全般的に明褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面にはススが付着し、324 の底部内面には炭化した米粒が付着していた。

甕 F (309・310) などで肩の体部に外反する口縁部がつく甕で、口縁端部は内上方に突出する。いずれも体部の大部分を欠く。口縁部内外面はヨコナデで調整するが、309 の内面にはハケメがのこる。体部外面は傾斜の強い左下りのタタキ調整を施し、内面はヨコ方向のケズリで整える。310 と同一個体の体部中位の破片にはタタキ目の上に粗いハケメの加えられているものがある。309 は暗褐色、310 は白褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。口径は309 が13.5 cm、310 が11.8 cm。

甕 G (314~316) 口縁部が屈曲して立ち上るもので、体部は長胴丸底であると考えられる。口縁上半部は314 では強く外傾するが316 は直立に近い。口縁端部は面をなすが、内傾するもの、外傾するものがあり、一定した形態を示さない。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部上半部のこる316 では外面には細かいハケメ調整を施し、上端付近にヨコナデ調整を加える。内面はヨコ方向のケズリで平滑に整える。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。316 体部外面にはススがうすく付着している。口径は314 が31.0 cm、315 が29.2 cm、316 が26.6 cm。316 の体部最大径32.6 cm。

甕 Ia (311~313) S字状に屈曲する口縁部のつく台付甕。口縁部の屈曲は強く、端部は丸い。口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデ、外面をハケメで調整するが、313 の頸部内面にはヨコ方向のハケメ調整が断続的に施されている。体部外面のハケメ調整は肩部以下に施したのち肩部以上に施し、さらに両者の接する部位に水平方向のハケメを施すが、312 では水平方向のハケメがない。台脚部内面はナデで調整し、外面にはナデの上に体部のハケメ調整がおよぶ。ハケメ条痕の間隔は313 が幅1.5 cm でハケメ条痕が10本であるのに対し、312・313 では幅1.8~2.0 cm で8本と粗い。313 は口径30.4 cm の大型品で白桃色を呈する。311・312 は暗褐色を呈し、外面にはススが厚く付着するが、312 の台脚部にはススがみられない。312

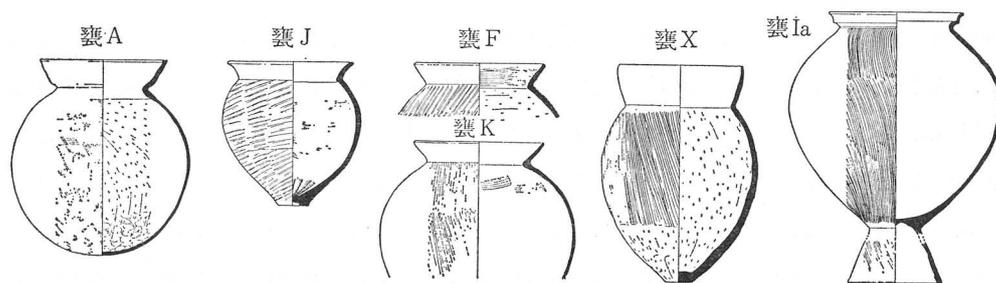


Fig. 29 SD8520出土の甕

第Ⅳ章 遺物

は口径13.8 cm, 器高28.0 cm (推定), 体部最大径22.8 cm。311は口径16.0 cm。

甕 J 甕J (328~330) 最大径が中位より上にある丸い体部に、外反する口縁のつく甕である。口縁端部は328が丸くおわるのに対し、329・330は上方にわずかに突出する。底部ののこる328では小さな平底の外周が輪状に突出し、外面中央がくぼんでいる。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面にはタタキ調整を施す。タタキ目の方向は328・329は左下りであるが、330は右下りである。328は外面中位よりやや下ののこる水平方向の粘土紐接合痕を境に傾斜が変化し、330では底部寄り3分の1の範囲のタタキ目の傾斜が強い。330では傾斜の変化する部位の幅2 cmの範囲にナデ調整が施されてタタキ目はみられず、また内面の対応する部位より下はハケメ調整で整えるだけであるが、より以上の部分はハケメ調整ののちにナデ調整を施してあげている。茶褐色を呈し、胎土に細い砂粒を多く含む。329は体部および口縁部の破片であるが、内面のくぼみを利用して白色顔料を溶くのに利用した形跡がのこる。328は口径12.7 cm, 器高15.1 cm, 体部最大径14.6 cm。329は口径14.9 cm, 体部最大径15.9 cm。330は口径15.5 cm, 器高約29 cm, 体部最大径19.1 cm。

甕 K 甕K (319) 球形の体部に外傾する口縁部のつく甕で、体部下半部を欠失している。口縁部はわずかに内彎し、うすく、端部は上方にわずかに突出する。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、内面をナデで調整する。外面のハケメの間隔は2~3 mmと粗く、タテ方向をとる。内面のナデ調整は念入りで、平滑にしあげているが、部分的にハケメがのこる。器壁は3 mmの薄さである。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。外面全面にススが付着する。口径13.5 cm, 体部最大径20.6 cm。底部を欠く。

甕 X その他の甕 (331・332) 331は壺308に近い口縁部の形態を示すが、器外面にススが付着しており、煮炊に用いられたものである。わずかに外反した口縁部の端部をうすくつくり、内外面にヨコナデ調整を施す。体部外面はタテ方向の細かいハケメ調整、内面はナデ調整でしあげるが、内面器壁には約2 cmの間隔をもった水平方向の粘土紐接合痕跡がのこる。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.4 cm。332はやや細身の長胴を呈する体部に内彎する長い口縁部のつく甕で、底部は小さな平底をなす。口縁端部はうすく丸い。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面の上3分の2の範囲をタテ方向の目の粗いハケメ調整で、以下の部分をタテ方向のケズリ調整で整える。体部内面にはほぼタテ方向のケズリ調整を施す。底部外面には布目圧痕がみとめられる。茶褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を多く含む。口径12.9 cm, 器高22.6 cm, 体部最大径16.7 cm, 底径3.0 cm。

ii 縄文式土器 (Fig. 30)

6ACA区のパラス層から12点の縄文式土器が出土した。奈良県北部では縄文式土器の出土例はほとんどなく、平城宮域でも初見である。極小片の4点を除く8点を図示したが、いずれも摩耗しており、パラスとともに北方から流入したものと考えられる。口縁部(口縁部付近を含む)破片3点、体部破片9点である。胎土含有物の共通性と推定器形などからみて、いずれも同一時期(縄文時代中期後半)に属している。器厚は5~11mmである。

深鉢 a 口縁部破片(1~3) 1は口縁部断面が丸棒状を呈し、直口形態の深鉢となるが口径は推定し難い。表面・裏面とも篋状工具による横方向の整形痕がわずかに認められる。胎土中

には他の破片と同様に砂利、長石が多く含まれている。色調は暗褐色で、焼成は良好。

2・3は口縁下より体部に移る部分の破片であり、キャリパー形の深鉢と考えられる。表面、裏面とも1と同様の整形痕が認められるが、裏面の剝落が著しい。表面は暗褐色を呈し、一部ススの付着が認められる。3は口縁がやや内彎する小型深鉢である。口縁部には3条の平行沈線（沈線幅5mm、断面はU字形）で長楕円形区画を描く。体部には撚りの細かい $R < \frac{L}{2}$ の原体を斜行させている。施文は縄文→平行沈線区画の順序でおこない、口縁部と体部界には最終仕上げの磨り消しがみられる。色調は淡黄色で、焼成は良好。胎土中には大粒の長石が目立つ。

b 体部破片（4～8） いずれも深鉢と考えられる。5～8はすべて縄文が斜行している。5・7・8は $R < \frac{L}{2}$ の原体であるが、6は観察が困難である。4の表面には竹管先端による擦痕が認められる。いずれも内面整形は篋状工具で行われている。色調は4・5が暗褐色、6・8が淡黄色、7が黒褐色を呈する。なお7の下部には厚いススの付着がみられる。

深 鉢

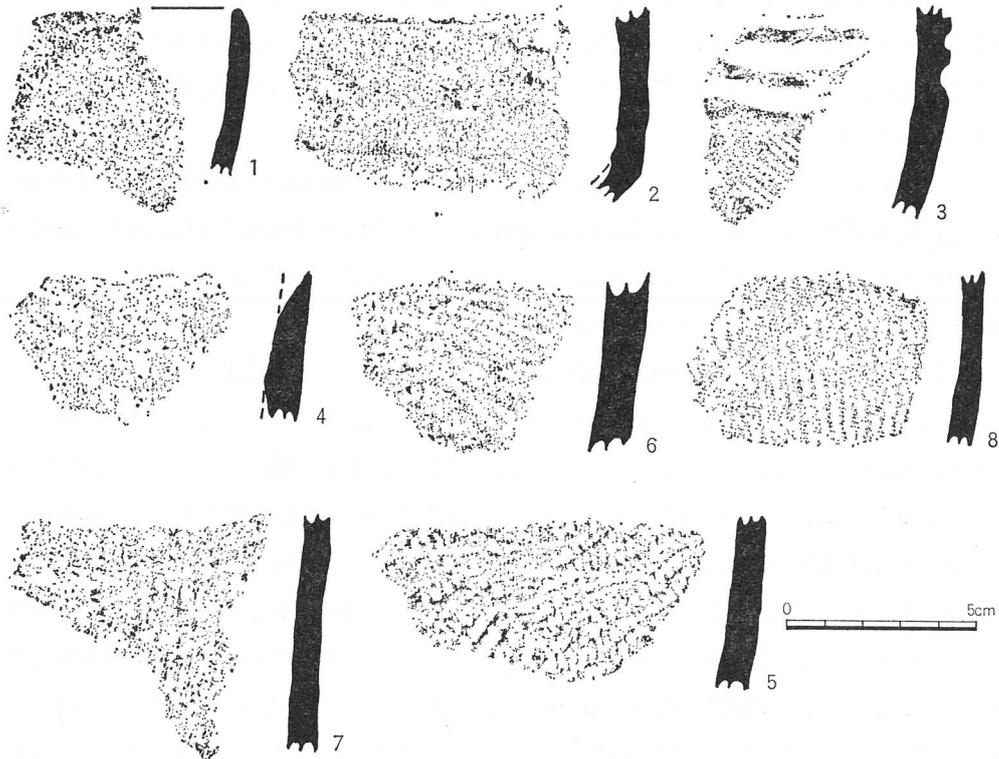


Fig. 30 縄文式土器拓影

2 埴輪

SD6030, SX6035, SK6037 からは各種の埴輪が出土している。数量は多くないが円筒埴輪のほかに蓋形、盾形、人物形、家形、動物形などの形象埴輪がある。なお、6ACA地区の奈良時代園池 SG8500 から盾形埴輪の小片が出土しているので併せて記述することにした。

i SD6030 出土埴輪 (PL. 28・29)

SD6030 から埴輪が5点出土した。このうち、下層が円筒埴輪1点、上層が円筒埴輪1点、盾形埴輪1点、蓋形埴輪1点、人物埴輪1点である。

a 下層出土の円筒埴輪 胴部の小片であるが、復原直径が約50 cm の大型品である。突帯1条が残る。外面をタテハケメのちヨコハケメ、内面をヨコ方向ないし斜方向のハケメで調整する。ハケメは内外面ともにきわめて細かいもので、ヨコハケメの原体の幅は7.1 cm 以上である。突帯は断面長方形で幅広く低い。ヨコナデで調整する。ただし、蓋形埴輪の円筒部の可能性もある。BL 16 I 黒出土。

b 上層出土の円筒埴輪 (502) 底部の破片で、基底部分と胴部第1段が残る。突帯は断面台形で、横端面は凹面をなす。胴部第1段には相対する位置に一对の円形透孔があく。外面をタテハケメで調整し、胴部第1段にはさらにヨコハケメを施す。内面はナデ、突帯はヨコナデで調整する。底部径20 cm。AR 06 I 砂出土。

盾形埴輪 c 盾形埴輪 (501) 円筒埴輪の前面に盾部のとりつくもので、盾部上縁が山形に高くなる。盾面にはヘラで文様を描く。文様は平行線3本の中に綾杉文を配した綾杉文帯と鋸歯文からなり、周縁を綾杉文帯でふちどったのち、水平な綾杉文帯2本で盾面を上中下の3段に区画し、上下の2段には上向きの鋸歯文4個を配する。中段は垂直な綾杉文帯2本で3区にわけ、左右の2区には内向きの鋸歯文4個を描く。中区は無文である。背面の円筒埴輪は、口径と底径がほぼ等しく、突帯が4条つく。突帯は断面台形で横端面は凹面をなす。胴部第一段と第三段とに、盾面と平行する方向の円形透孔が各一对あく。なお、突帯位置には三角形の粘土板をはりつけて、盾部との接合を補強している。盾部前面をハケメとナデ、背面をナデ、周縁をヘラケズリで調整する。円筒部は外面を斜ハケメ、内面をタテハケメ、突帯をヨコナデで調整する。総高118 cm、盾面幅50 cm、盾面長さ80 cm、円筒部底径24 cm。黄褐色軟質。AT 07 I 砂出土。

蓋形埴輪 d 蓋形埴輪 (511~514) 翼状の羽根飾り部である。511は受皿の上に十字形飾り板を貼りつけたもので、4枚の飾り板のうち2枚は完形あるいはほぼ完形に近いが、他の2枚は基部のみを残す。飾り板は厚さ1.7~1.4 cmで、頂部と外側の3ヶ所に鱗状の突起を設け、表裏にヘラで直弧文風の文様を描いている。全面をハケメ、周縁をヘラケズリで調整する。受皿外底にとりつく筒部は欠損する。512は飾り板の断片、513・514は鱗の部分にあたり、いずれも同一個体に属する。復原上端幅62 cm。黄褐色硬質。AU 07 I 黒出土。

e 人物埴輪 (506) 草摺の破片である。垂直な平行線3本を1組にして、外面を4等分したのち、各分界内を水平線で15~16の帯に分割し、無文帯を1条をはさんで3~4帯1単位に

2 埴輪

綾杉文を施している。外面をハケメ、内面をナデで調整し、内面には粘土紐接合痕を随所に残している。黄褐色軟質で、外面にはベンガラが残る。裾部径 56 cm, 残存高 18.5 cm。AT 07 I 砂出土。

f 家形埴輪 (509・515) 台部破片である。鼠返しのすぐ上に接して、垂直線 3 本と水平 2 線本があり、柱・入口を表現したものと思われる。灰白色軟質。515 は家形ないし盾形と思われる小片である。長方形を線刻する。黄褐色軟質。BB 09 I 黒出土。

家形埴輪

g 動物形埴輪 (510) 芯のつまった円棒の一端に顔状のものを作りつけ、目を表現したと思われる小円孔をあけ、口のような挟りがある。頭頂部には細い角状の突起が 1 本あるが、基部を残すだけである。動物らしいが何を表現したものか不明。灰白色軟質。AS 06 I 黒土。

動物形埴輪

ii SX6035 出土円筒埴輪 (PLAN 5, PL.29)

棺に使用した円筒埴輪

SD6030 の東約 20m の朝堂院東面築地に東接する地点で検出された土壙墓に用いられた円筒埴輪である。円筒埴輪を縦に半截したものを連ねて棺蓋とし、両端を円筒埴輪の破片で閉じたもので、棺底は平坦な地山である。円筒埴輪は 3 個体あり、うち、全形に復原しえたのは 1 個体である。

a 1号埴輪 (504) 全形のわかるものである。底径よりも口径が大きく、底部から口縁部にかけてゆるやかにひろがる胴部に、4 条の突帯がめぐる。口縁部はわずかに外反し、幅広い端面中央がわずかに凹む。突帯は断面台形でやや高く、横端面はごくわずかに凹む。胴部第 1 段と第 3 段に、下が円弧をなす半円形透しがあり、各一对同じ方向にあく。口縁端部内外面をヨコナデ、胴部外面を左上り斜めハケメ、内面をナデ、突帯をヨコナデで調整し、内面には粘土紐接合痕が若干残る。なお、外面のハケメは、基部から胴部第 2 段中位までを連続して施したのち、それ以上をまた連続して行っている。胴部第 2 段中位までとそれ以上との 2 回にわけて積み上げたためであろう。黄褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 44 cm, 高さ 62 cm, 底径 26 cm。

1号埴輪

b 2号埴輪 (503) 1号埴輪と同形のものであるが、胴部第 1 段以下を欠く。透しも半円形である。1号埴輪に比して突帯はやや幅広く、横端面は凹面をなし、上端がわずかに突出する。口縁端部内外面と突帯をヨコナデ、胴部外面を左上り斜めハケメ、内面をナデで調整し、内面には粘土紐接合痕が若干残る。外面のハケメは 1号埴輪に比してより垂直に近く、きめも細かい。茶褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 40 cm。

2号埴輪

c 3号埴輪 (505) 底径と口径がほぼ同じ円筒形の胴部に 4 条の突帯をめぐらせ、胴部第 1 段と第 3 段には各一对、同方向の円形透孔がある。小片のため、胴部第 2 段に透孔があったかどうかわからない。口縁端は大きく外反し、端面は中央がわずかに凹む。突帯は断面方形で、幅せまく低い。横端面は凹面をなす。口縁端部内外面と突帯をヨコナデ、胴部外面をタテハケメのちヨコハケメ、内面をタテハケメないしヨコハケメで調整する。外面のヨコハケメは基部と口縁上端にはない。内面の突帯裏面のハケメは幅約 2 cm の一周するナデによって消されている。突帯成形および調整時のものであろう。胴部第 2 段中位に擬口縁がみられ、これ以下と以上との大きく 2 回にわけて積み上げたものと思われる。茶褐色軟質で、外面に黒斑がつく。口径 37 cm, 高さ 63 cm, 底径 24 cm。

3号埴輪

iii SK6037 出土埴輪 (PL. 29, Fig. 31)

SK 6037 からは盾形埴輪, 家形埴輪が出土した。
いずれも破片で, 器面の荒れもはげしい。

盾形埴輪 a 盾形埴輪 (516) 円筒部前面に鼓形の盾部をとりつけたもので, 盾部上半を欠く。残る下半部には, 下に2個, 上方中央に1個, 計3個の小孔が正三角形に配される。器面が荒れており, 調整手法は不明。黄褐色軟質。復原高約70 cm, 盾面下端復原幅約30 cm, 円筒部下底径18 cm。

家形埴輪 b 家形埴輪 (507・508) 507は妻部の屋根に接する部分の断片である。平行線2本を1組として, 妻柱, 横板を表現し, 妻柱の左に接して入口らしい表現が断片的に残っている。508は壁の断片で, 間隔をあけて水平線2本が描かれている。いずれも器面が荒れ, 調整は不明。厚さ1.0~1.8 cm。

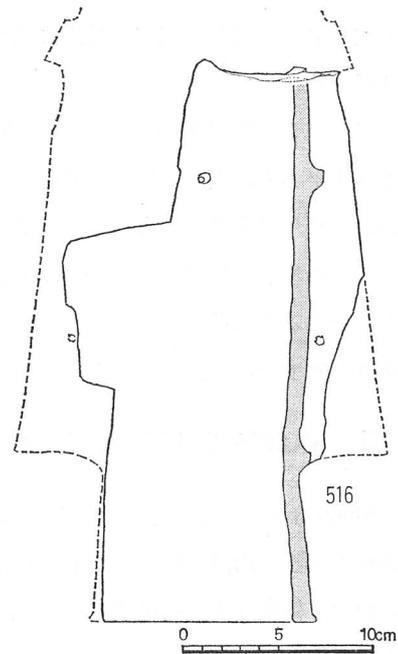


Fig. 31 SK6037出土盾形埴輪

iv SG8500 出土埴輪 (Fig. 32)

盾形埴輪 a 盾形埴輪 (517) 円筒埴輪の前面に板状の盾面をとりつけたもので, 盾面には平行する2本のヘラ描き沈線がある。小片であるため詳細は不明であるがおそらく盾面を内外二区に仕切る画線とみられる。盾面厚さ1.6 cm, 円筒厚さ1.2 cm。黄灰褐色を呈し, 砂粒を含む。黒斑あり。63, 灰白粘土層出土。

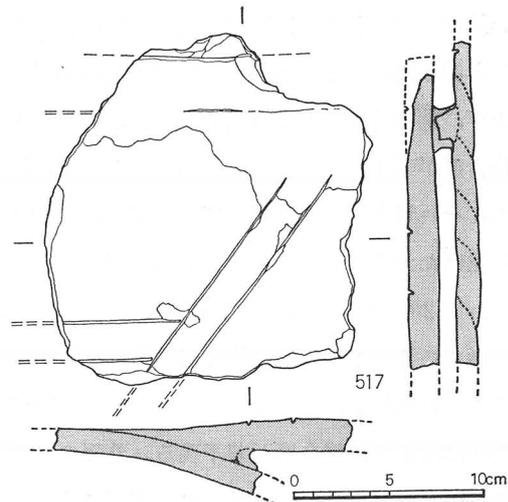


Fig. 32 SG8500出土埴輪

3 木製品

6AAW・X-SD6030 と 6ACA-SD8520 からは木工具, 農具, 発火具, 容器, 編物, 建築部材などの各種の木製品が多量の自然木, 削屑とともに出土した。両者とも類似した内容をもっており, 古墳時代の生活, 生産用具を考察するための良好な資料となっている。

A SD6030 出土木製品 (PL.30~41, Tab.5~13, Fig.33~35)

木製品は調査した溝の全域にわたって出土している。朝集殿基壇の西側に位置する北区屈曲部分(6AAW-Kライン以北)の出土量に比べて, 基壇の東南隅から南流する南区域(6AAW-Bライン以南)の出土量が多い。今回の報告では自然木や削り屑などを除く152点の木製品をとりあげるが, 北区から出土したもの30点, 南区から出土したもの111点という構成である(出土地点不明¹⁾11点)。

この溝は上層(I黒・I黒B・II砂), 下層(II黒・III砂・IV砂・暗褐色砂)に大別される。木製品の出土状況を層位ごとにみると, 上層出土のもの85点, 下層出土のもの56点となり, 上

		南 区													
		小地区													
層 位		AR 08	AT 07	AR 06	AR 07	AS 06	AS 07	AU 07	BA 07	BA 08	BB 08	BB 09	計		
I	黒			6		10	20			1			37		
I	黒 B					1	5	1					7		
II	砂			7		9	2			8	3		29		
II	黒														
III	砂	2	1		3		2		7	10	5		30		
IV	砂			1					5	1			7		
	暗褐色砂											1	1		
	計	2	1	14	3	20	29	1	12	20	8	1	111		

		北 区								
		小地区								
層 位		BK 16	BL 16	BM 16	BN 16	BK 12	BN 12	BQ 14	計	合 計
I	黒					3		1	4	41
I	黒 B									7
II	砂	4			3	1			8	37
II	黒									
III	砂	8	2	2	4				16	46
IV	砂	1			1				2	9
	暗褐色砂									1
	計	13	2	2	8	4		1	30	141

※ 出土地点不明11点を除く

Tab.5 SD6030木製品小地区別出土点数

- 1) 遺物の移転, 保存容器の変更, PEG 含浸槽での保存期間中などにラベルの文字が消えたり, ラベルがなくなったものがでてきた。

第Ⅳ章 遺物

層からの出土量が多いことがわかる。下流の AS06, AS07 では上層から大型木材をふくむ木製品が集中的に検出され、その北方の BA07, BA08 では主として下層において発見されるというように、地点によって堆積の変化がみとめられる (Tab. 5)。

木の製品分類

木製品は、木工具・農具・什器・建築部材・その他に大別して整理した。それを出土層位ごとに分類すれば、おおむね上下層ともに各種類をふくんでおり、上下二層による種類別の顕著な差異をみとめることはできない。しかし、農具のうち注目すべき膝柄股鋏や広鋏・平鋏あるいは一木鋏などは上層から発見され、建築部材に分類した2点の梯子は下層から検出されるなど、詳細にみれば上下二層の木製品構成の差異が明らかになる可能性もあるが、出土点数が少なく、類例の少ないことから形式分類も行えないので、ここでは一括してあつかうことにし、説明の末尾に出土地点を記しておくことにする。これらの木製品の特色を簡単にいえば、未成品がみられず、損傷を受けて破損したものが大半を占めていることである。つまり、消費地における廃棄品であり、製作地としての要素はとくに見られない。

i 木工具 (PL.30, Tab.6)

鉄斧を挿着した斧の膝柄。縦斧と横斧との区別がある¹⁾。いずれも幅3.4~1.2 cm の着装部をつくりだしていることから、鉄製の袋状鉄斧をつけた中・小の斧柄であることがわかる。5点出土したが、いずれも柔軟性とむサカキの材を利用している。

縦斧柄

a 縦斧柄 (1・2・3) 木の枝分れした股部を利用した斧柄。幹の部分を台部とし、枝の部分を握部とする。台部の左右側面を削りこんで扁平にし、下端に鉄斧を挿入する舌状の着装部をつくるものだが、1では着装部を一段細く削りだすのに対し、2ではわずかに細めるにとどまりとくに段をつくらない。いずれも握部に対して平行に刃をつけたことをしめす装着の押圧痕がのこる。基部の上端は粗く削りおとす程度の加工で、握部は全体に樹皮を除く。

この斧柄が小形であることや、弾力性のある枝を握部にしていることからすれば、材を切断するマサカリ的な機能は想定しがたい。むしろ、材を側面から削つたり、クサビで材を割り裂いたのち、まだじゅうぶん離れていないところを切り離すような機能を想定すべきだろう²⁾。

横斧柄

b 横斧柄 (4・5) 木取りや材種は縦斧柄と変らないが、鉄斧を着装するとき握部に対して刃が横向きになるように台部をつくっている点がことなる。完形に近い4では長い基部の

番号	(全長)	(台部)		(着装部)			(握り部)	(材質)	(出土位置)	(層位)
		長さ	幅	長さ	厚さ	幅				
	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm			
1	50.3	12.0	3.4~1.5	3.3	1.6	2.2	1.8~1.2	サカキ	AS06	間層
2	62.4	13.1	3.4~2.6	3.9	2.8	1.8	2.5~1.7	サカキ	AR07	Ⅲ砂
3	(台部の一部のみ)									
4	36.2	22.1	4.0~2.1	4.5	2.4	1.8	2.3~1.5	サカキ	AS07	Ⅰ黒B
5	(19)	(8.6)	3.7~2.8				2.1~1.7	サカキ	BK16	Ⅲ砂

Tab.6 斧柄の寸法

() は現存の数値

1) 斧柄の用語は佐原真「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集—慶祝松崎寿和先生 六十三才記念論文集』1977, にしたがう。斧柄の部分名称は財大阪文化財センター『池上遺跡』

第4分冊の2木器編, 1978, にしたがう。

2) 弥生時代の斧柄に柱状片刃石斧を縦につけるものがあるが、同様の機能をもつものである。

後面中央に稜線をとおし、嘴のようにのびる着装部を一段細く削ったところに、鉄斧を装着した痕跡をとどめる。5は台部の着装部を欠くが、前面と後面が平滑面をなしているので横斧柄とみてよい。用途はいわゆる手斧であり、材の表面を平面的にはつり取るもの。一概にいえませんが、縦斧に対して握部が短いのが特徴となる。

ii 農具 (PL. 31~34)

農具としては、鋤・鍬・エブリ・鎌などがある。主としてカン類の材を用いていわゆるミカン割りにした板材を加工したもので、多くの場合柄が欠除している。鍬の身部に鉄の刃先をつけたらしいものもある。

a 一木鋤(6・7) 身と柄を1木でつくる¹⁾鋤。6はほぼ完形をとどめる。割板を加工したものの。身の前面はゆるやかな舟底形を呈する。後面中央には柄の延長部を隆起させ、左右に向けて次第に厚さを減じている。身の肩部は柄と直角に交るが、下部にくらべて帯状に隆起させ少し厚さを増している。踏込み時の加圧を考慮したのであろう。身の先端は欠損のため不明。鉄の鋤先の有無も不明である。柄は身に対して約20°の角度をもち、身の後面中央部分から斜め上方にのび、屈曲する。柄の断面は円形を呈し、ゆるやかなS字形の曲線を描いている。柄元はT字形を呈し、柄に対して直交する把手がつく。現存長87.5 cm。身幅11.9 cm 以上、同長さ15.0 cm 以上、同厚さ3.8~0.4 cm。柄長72.5 cm、同直径3.2~2.5 cm、把手長6.7 cm以上、同径3.3~2.6 cm。材；アカガン。AS06 I 黒B出土。

一木づく
りのスキ

7は一木鋤の断片である。身と柄の一部をのこす。身は扁平で板状を呈するものらしいが、左右の側辺が欠損しているため不明。肩部の高さが左右でことなり、一方が1.5 cm ほど高い。身の後面中央部を隆起させて柄をつくりだす。柄は身に対して約20°の角度で斜め上方に立ち上る。6よりも加工が粗い。現存長33.5 cm。身の現存長18.3 cm、同厚さ0.7 cm、同幅5.2 cm。材；アカガン。AS07 I 黒B出土。

b 組合せ股鋤(8) 身と柄とを別木でつくる鋤であるが、身の中央に抉りをいれて二股につくる組合せ股鋤で、約半分を欠失している。後面は平滑面に、前面はゆるやかな舟底形に削っている。着柄軸は断面を半円形に削り、後面の約半分に一段の切込みを入れ、前面の端部に節状の段をつくる。いずれも柄を緊縛するためである。身の肩部上面は左右にほぼ水平面をなし、左右の側縁はわずかに内彎しながら下降する。身の先縁中央から股の抉りをいれるが、それは身全体の約1/2.5におよぶ。身の刃部は縁を薄くして剣先状を呈する。身の中央に柄を固定する一対の方孔をあけ、前面では緊縛用の紐などが、身から突出しないように、2孔間に溝をえぐっている。全長37.8 cm。着装軸長12.4 cm、同幅約2.5 cm、同厚さ2.3~1.5 cm。身部長さ25.4 cm、同厚さ2.4~0.4 cm、同復原最大幅14.5 cm。材；アカガン属。BB08 II 砂出土。

組合せの
二股クワ

c 膝柄鍬A(9・10) 擡形の身に斧柄に似た膝柄を装着したとかがえられる鍬²⁾。9は全長の約1/3.5を着柄軸とし、それ以下を擡形の身とする。加工は粗いが、前・後面の区別があり、前面は平滑面とし、前面では中央を厚くして左右の側辺を薄くして舟底形に削っている。着柄軸の断面はカマボコ形を呈する。すなわち、前面を平坦にし、後面に丸味をもたす。

膝柄クワ

1) 鋤・鍬の部分名称については財大阪府文化財センター『池上遺跡』第4分冊の1木器編、

1978、にしたがう。

2) 膝柄鍬の分類については考察にゆずる。

第Ⅳ章 遺物

その端部は後面から削りこんで節状につくる。身の肩部には左右から鋸で切込みをいれた長方形の突起をつくる。おそらく膝柄を固定するための措置であろう。身は柳葉形を呈し、縁辺を比較的薄くつくる。一側縁では若干の損傷を受けたのちも、なお使用した痕跡がみとめられる。先縁部には磨滅痕が顕著であり、鉄刃先をはめた痕跡はない。全長49.8 cm。着柄軸長14.6 cm, 同幅3.1 cm, 同厚さ2.3 cm。身部長35.2 cm, 同幅10.3~7.8 cm, 同厚さ2.0~0.3 cm。材；コナラ亜属。BM16Ⅲ砂出土。

10も9と同じような形をとるが、保存がよくない。前面を平滑面とし、後面を鈍い舟底形に整えている。着柄軸の断面は山形を呈し、後面の上部に一段の切込みをいれるのは、別木の柄を固定するためである。着柄軸と身との間には左右の突起がなく、次第に身幅をひろげている。現在、身の先縁は欠損している。現存長36.3 cm。着柄軸現存長17 cm, 同幅3.2 cm, 同厚さ1.8 cm。身部残存長19.3 cm, 同幅7.8 cm, 同厚さ1.7~0.2 cm。材；アカガシ属。BA08Ⅱ砂出土。

膝柄股クワ

d 膝柄股鍬(11~13) 薄い板材からつくる二股の鍬。従来の見解では、身の上部に棒状の柄を固定する一種の着柄鋤とする見方がつよかった。しかし、近年になって身の後面に斧柄のような膝柄を固定した類似の股鍬が発見され、鋤とするよりも鍬に想定する方の可能性がつよまった。

11は鍬身の完形品である。着柄軸を撥形につくり、身部を二股につくる。着柄軸の先端は断面半円形の棒状に削り、下降するにしたがって左右に幅をひろげ、その伸びきったところが笠形に突出する。身部は刃を外側にした刀身を2本ならべたような形を呈し、着柄軸の突出の下部から次第に幅をひろげ、身のほぼ中位のところから再び幅を縮める。先縁の中央から上部分に向う股を抉り、外縁を刃状に薄くする。全長55.8 cm。着柄軸長16.0 cm, 同幅1.5~11.9 cm, 同厚さ1.2 cm。身部長39.8 cm, 同最大幅20 cm, 同厚さ1.0~0.4 cm。材；アカガシ属。AS07Ⅱ砂出土。

12は11と同形だが、着柄軸と身部の一部が焼失している。この例では、前面の着柄軸から身部中央にかけて押圧痕跡があり、さらに左右の突出部の下部側面にも緊縛痕跡がのこり、膝柄の台部を固定した位置を示している。現存長38.0 cm。着柄軸幅2.4~4.5 cm, 同厚さ1.4 cm。身部最大幅14.5 cm, 同厚さ1.5 cm。材；アカガシ属。BK12Ⅱ砂出土。

13は膝柄股鍬の破片。先の2点にくらべて身部が長く、幅が狭い形になる。下層からの出土品で、後述する佐紀池の例に類似しており、古い形式を示す可能性がつよい。現存長29.8 cm。刃部幅4.8 cm, 同厚さ0.8~0.4 cm。材；コナラ。BK16Ⅲ砂出土。

クワの膝柄

e 鍬の膝柄(14・15) 鍬の身に装着した柄である。一見横斧の膝柄に見えるが、台部の後面が長い平滑面をなし、台部前面頂部に緊縛用の溝を切込んでいるところが斧柄とはことなる。14の台部前面下部には紐でしばりつけたらしい緊縛痕跡がみとめられる。また、内彎気味の太い握部の保存はよく、末端を失うがほぼ全長とみてよからう。台部と握部との角度は57°内外である。15も同形の膝柄だが、台部しかのこっていない。

14は膝柄鍬9とともに下層の接近した位置から検出されており、両者は一組みになる可能性がつよい。15は上層から出土しており、膝柄股鍬(11・12)にともなう可能性もある。台部の幅が着柄軸の幅よりも若干広いことを除くと、とりつけてみて不合理は生じない。材はともに

サカキ。14の現存長60.5 cm。握部径 3.2 cm。台部長23.7 cm, 同幅 3.0 cm内外。BN16Ⅲ砂出土。15は台部長23.3 cm, 同幅 3.2 cm。BN16Ⅱ砂出土。

f 広鋏 (16) 一部を欠くがほぼ完形の広鋏である。長方形の板から加工したもの。上縁と両側縁に弧状の抉りをいれる。上縁中央部には一段低い半円形の切込みをいれる。後面には逆T字形の隆起を削り出す。縦の隆起はいわゆる舟形突起に相当するもので、柄孔をあけている。舟形突起の下端にそって、横位の突起を削り出す。この隆起は下端部を厚くし、帯状に削りのこし、鋏の下縁との間に段状の切込みをいれている。おそらく鉄刃先を先縁にはめる装置とおもわれる。鋏身の前面は平滑に整え、上縁の弧状切込みの下に蟻溝を横断させている。鋏身の縦割れを防止する補強材をはめたのだろう。柄孔は縦長の楕円形を呈し、約45°の角度であけている。全長28.5~26 cm。幅15.4~11.3 cm, 厚さ3.0~1.1 cm。柄孔径3.8×3.0 cm。材;アカガン。BK16Ⅲ砂出土。

広クワ

g 平鋏 (17) 長方形の板から加工した完形の平鋏。全体を撥形につくり、とくに前面と後面とを区別しない。頭部の幅を狭くし、中央に縦に長い長方形の柄孔をあける。柄孔の下縁が約60°の角度をもつことから、鋭角に柄がつけられていることがわかる。刃部は下方に向けて次第に薄くし、刃縁を薄く削りだしている。ただ、刃縁の一方は使用時の磨耗が著しい。全長25.6 cm, 幅11.0~5.6 cm。厚さ2.1~0.6 cm。柄孔径5.1×2.9 cm。材;アカガン。BB08Ⅲ砂出土。

平クワ

h フォーク状農具 (18) 身の下部に数本の歯をつくるフォーク状農具の断片。現状では歯の1本をとどめるにすぎない。歯の上部は扁平だが、下降するに従って幅を縮め、先端では串状を呈する。上縁は身の肩部にあたるらしく、斜めに削っている。この破片は小さく、身の全形や着柄の状況を推測することはできない。現存長34.7 cm。歯の幅3.0~1.1 cm。同厚さ0.5 cm。材;アカガン属。AR06Ⅱ砂出土。

フォーク状農具

i 鋤柄 (19) 割材を丸棒状に加工したもの。一端は二次的に切断されているが、他端は旧形をとどめる。すなわち、丸棒の下端部を削りこんで断面半円形の半截形とし、先端部の弧面を斜めにそぎ、一側面から切込みをいれる。半截部の上面には横位の押圧痕があり、紐などを巻きつけて固定したいことを示す。材がカン類でないところに多少の疑念があるが、鋤などに着装した柄の断片とおもわれる。残存長32.9 cm, 直径2.5 cm, 半截部の厚さ1.4 cm。材;スギ。BK16Ⅲ砂出土。

スキの柄

j えぶり (20) 長方形の板材でつくる身部がほぼ完形でのこる。上下の長辺は一直線に削り、上縁の左右に方形の孔を各1孔あける。柄を支える棒材を挿入する孔だろう。左右の短辺は弧状につくる。前・後面の区別があり、後面の上寄りに横位の鈍いしのぎをとおす。ほぼ中心に楕円形を呈する柄孔をあける。この部分は少しく腐蝕が進むが、約137°の鈍角で柄を着装したようである。このえぶりは使用中に破損したらしく、3ヶ所に補修孔がある。しかし、下縁中央部の縦破を補修する孔は一孔しかなく、補修を断念した様子がうかがえる。全長38.2 cm。幅18.3 cm。厚さ1.1~0.6 cm。材;アカガン。AU07Ⅰ黒B出土。

エブリ

k 鎌 (21・22) 鎌の柄に想定しうるものが2点ある。21は割材を丸棒状に加工したもの。一端の木口から鉄鎌を装着する溝を切込む。この溝に直交する2面をそぎおとして平滑面とする。いま頂部には擦痕があるが、二次的に切断されたものようである。下端は焼失しており、

カマ

第Ⅳ章 遺物

全長を知ることはできない。一般的な鎌の柄は、外反する頂部の下寄りに溝が切り込まれており、この例はやや形を異にするがとりあえず鎌柄にあてておく。現存長24.2 cm。直径2.25～2.1 cm。溝の長さ5.0 cm。材；ヒノキ。BA07Ⅲ砂出土。

22は割材を丸棒状に加工した柄の下端。端部の木口面を斜めにそぎ、内側にやや突出する蹄形の柄尻をつくりだしている。他遺跡の例からみて鎌柄とみてよかろう。現存長16.2 cm。直径1.9～1.7 cm。材；アカガシ。AS06Ⅱ砂出土。

1 柄部残片(23) 割材でつくる棒状具の破片。現在では縦に割れた半分しか残っていないが、端部の一方が突出しているので工具類の柄に想定しておく。現存長7.2 cm。直径2.3 cm内外。材；ヒノキ。BL16Ⅲ砂出土。

タゲタ m 田下駄(24) 板目の割板材を加工し、長方形につくる左足用の田下駄である。表面と側面は粗い手斧はつりで整え、前縁の外側を弧状に削りこむ。鼻緒孔は3孔あり、前壺が内側に偏している。歯はつくりだしておらず、田下駄に類するものと思われるが、外枠をとりつけた痕跡はない。なお、鼻緒孔は錐であけている。全長24.9 cm、幅10.7 cm、厚さ1.8 cm。鼻緒孔径0.8 cm内外。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

ヨコツチ n 横槌(25) 心持丸太材を加工したもの。全長のおよそ半分を細く削りこんで柄とし、身の頂部は粗い手斧はつりで整え、表面は樹皮を除く程度の加工である。柄端は折損している。身に叩きの痕跡がみとめられず、一般の横槌にくらべて細身であるから、かならずしも横槌に限定できないかもしれない。現存長26.8 cm、身部径4.2 cm、柄部径2.4 cm。材；ジャシャンポ。AS07Ⅰ黒B出土。

タテツチ o 堅槌(26) 心持丸太材を加工したもの。現在では柄を欠損している。また腐蝕が進行しており、加工痕跡などは不明瞭である。身の横断面は楕円形を呈し、柄元部分の直径に対して頂部の直径が大である。側面周囲には叩きの痕跡がなく、頂部の木口面に若干の磨減がみとめられるので、堅槌に比定した。現存長14.6 cm、長径12.3～8.2 cm、短径9.5～6.2 cm、柄径2.9 cm。材；カキ。BR09暗褐色砂出土。

カケヤ p かけや(27) 心持角材を加工したもの。身は直方体につくり、先端を表裏から斜めに截ちおとす。身の中央部の4面に敲打による窪みがあり、その周辺に刻線状の刃痕が無数にのこっている。柄は丸棒状に粗く削りこんでいるが、先端を折損している。現存長42.1 cm。身の最大幅11.6 cm、同最大厚8.4 cm、柄部径4.4～3.7 cm。材；ジャシャンポ。BQ14Ⅰ黒出土。

ツチノコ q 槌の子(28) 心持丸太を加工したもの。両木口面を削りおとし、中央部にV字形の溝をめぐらす。側面周囲は樹皮を除く程度の加工にとどまる。一部分が焼け焦げており保存もよくない。長さ14.5 cm、直径5.7～5.0 cm。材；広葉樹。出土層位不明。

タタキ板 r 叩き板(29～32) 具体的な使用目的を類推しえないが、柄をもち何物かを叩いた道具であることが想定しうるもの、あるいはそれに準じる使用が想定されるものである。かならずしも農具に限定しえないが、一応この項に入れておく。29は板目の板をすづまりの羽子板状に加工したもの。全長のおよそ半分を柄とし、両側面から細く削りこむ。身は平滑面をなすが、一面の中央部に横位で幅広の磨減痕跡がある。おそらくこの部分で何物かを叩いたことを示すのであろう。長さ29.9 cm、幅9.0～2.1 cm。厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。AS07Ⅰ黒B出土。

30は心持丸太材を半截し、羽子板状に加工したもの。表面には割裂きの面を残しているが、

平滑面をなす。全面に磨滅痕跡をとどめ、とくに先縁部分が顕著である。裏面はなお丸太の円弧をとどめ、中央部で少しく面取りし、半ばから先縁にかけて斜めにそぎおとす。全長のほぼ半分を細めて柄とするが、その断面は半円形である。身の先縁を刃物のように薄くし、柄の断面を半円形につくることからすれば、別木の柄を着装する土工具などの類に属する可能性もある。しかし、ここでは磨耗が身の表面に限られていることを重視して、この項にしておく。長さ36.8 cm、幅6.4~1.8 cm、厚さ1.8~1.4 cm、材；ツバキ。出土層位不明。

31は板目の細板材からつくる。全長の約半分を柄とする。柄は身よりも少しく幅を狭め、丸味をもたせて細く削る程度であり、身と柄の間に明瞭な境はない。身は柄より薄くし、方頭の木口面に若干の磨耗がみとめられる。叩き板とするよりも攪拌の道具とする方がよいかもしれない。長さ39.8 cm、幅3.7~1.9 cm、厚さ1.4~0.8 cm。材；ヒノキ。AS07黒色粘土出土。

32は31と同じような形をとるが、一側縁に刻目をいれ鋸のような形につくる。この刻目の部分には使用痕跡がみとめられ、側縁で叩いたことが想定される。この種の木器は奈良時代までひきつづきつくられているが、いまのところ用途を決めがたい。長さ33.7 cm、幅3.1~1.9 cm、厚さ1.3~1.1 cm。材；ヒノキ。BA08Ⅱ砂出土。

iii 什器類 (PL.34・35)

日常生活に使用する家具や道具類に想定しうるものは少ない。容器類の破片を主とするが、糸巻など紡織具と考えられるものもこの項にしておく。

a ちきり (33) 長方形の柁目板を用い、短辺に把手状の突出部を削りのこす。片面の突出部付根の付近に著しい磨滅がみられ、身の両面にも数条の擦痕がのこる。とくに一面のX字形の擦痕は刃物によって刻みこんだものようである。左右の突出部を軸とし、身部に経糸をまく織機のちきりに想定するのだが、布幅を示す身の長さが少しく短いところに難点があるかもしれない。長さ40.7 cm、身部長26.0 cm、同幅11.1~9.3 cm、厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。AS06Ⅱ砂出土。

チキリ

b 糸巻の横木 (34) 柁目の細板を加工したもの。中央部分を幅広にのこし、両端に向けて次第に幅を縮め末端では丸棒状を呈する。中央部では相欠様の仕口をのこしており、(一方は二次的に削りとられているが)同形の部材を十文字に組合せる糸巻の横木であることがわかる。現存部長19.4 cm、幅2.6~1.4 cm、厚さ1.8~1.2 cm。材；ヒノキ。AR06Ⅱ砂出土。

イトマキ

c 自在鉤 (35) 木の幹と枝の股を利用したもの。腐蝕が著しく、かつ一端を折損しているため、旧状はそこなわれている。幹の部分を嘴のように尖らせ、股の部分にものを吊す自在鉤に想定しておく。現存長16.8 cm、鉤長11.9 cm、吊手径1.8 cm。材；コナラ亜属。AS07Ⅰ黒出土。

じざいかぎ

d 案 (36) 丸太の二つの割り材を用い、木心をはずし木裏面を上面にする横木取りの案である。現在、縦に割れておよそ半分を欠損しているが、全形をうかがうことは可能である。台板は長方形の板状に削りだし、左右の短辺に外反する口縁をつくる。身の上面は平滑面をなすが、下面はわずかに丸底風に仕上げている。下面の長辺にそう部分に脚を削りだす。脚はわずかに外反する長台形の板状につくり、その中央部に弧形の削形をいれ、四脚とする。この削形は中心を意識して削りだしたものらしく、向って左側の削形が深くなり段が生じている。埋

あん

第Ⅳ章 遺物

没時に左右口縁部が変形しているが、全体の仕上げは丁寧であり、鉋による削り痕跡が顕著にのこっている。長さ45.04 cm。残存幅12.5 cm。通高7.9 cm、身の厚さ1.1~0.7 cm。材；ヒノキ。BM16Ⅲ砂出土。

容 器 e 箱形容器 (37・38・39) すべて断片だが、箱形の器形を想定しうる。37は割材を削りぬいた長方形の箱で、器壁の一部と底がのこる。現在、長辺の口縁部が内傾しているが、これは発掘後の不手際で乾燥したためであり本来はわずかに外反したもののようである。それは底部から器壁立上り部分に残る刳形から推測しうるので、長辺・短辺ともにみられ、広口の箱形容器となる。現存長23.7 cm。現存幅11.0 cm、底部厚さ1.5 cm。材；ヒノキ。出土層位不明。

38・39は口縁部の破片で、木口部なので長方形容器ならば短辺にあたる。斜めに立上る幅広の口縁端形を形成している。38は器高7.5 cm以上、口縁端の幅5 cm。材；コウヤマキ。BN16Ⅱ砂出土。39は箱の隅部の残片で、器高4 cm以上、口縁端の幅4 cm。材；ホオノキ。BB08Ⅲ砂出土。

蓋 f 蓋の破片 (40) 外面をわずかに甲高とし、内面を浅目に窪ませている。現存長7.5 cm、現存幅3.0 cm、高さ0.7 cm。材；スギ。AS06Ⅱ砂出土。

g 舟形容器 (41) 残存状況が悪く細片になっているが、全形をうかがうことは可能である。二つ割りの丸太材からつくるもので、木裏面を口縁部にあて、長径を年輪方向にとる横木取りである。全体を平底の舟首形にかたどり、底部は内外とも平滑面をなす。口縁部は斜めに立上り、端に稜角をつける。尖形に対応する短辺の口縁部は直線になるようだが、把手の有無は不明である。他遺跡にも短辺にコ字形の把手がつく同形の容器があり、ツルベに比定されている¹⁾。本例の場合把手の有無が不明のため用途をきめがたい。現存長33.5 cm、最大幅23.5 cm、高さ5.5 cm、底の高さ1.1 cm。材；スギ。BB08Ⅲ砂出土。

じゅうのう h 十能形木器 (42) 箱の一短側壁を欠いたような身に棒状の把手をつくりだしたもの。縦半分程を欠損するが、全形をうかがうことは可能。心はずした二つ割り丸太を用い、上面を木裏面とする横木取りでつくる。身は隅欠きの長方形を呈し、側壁が斜めに立上る。把手をつくりだす短辺の口縁部を厚くし、これに対応する短辺には側壁を欠く。一短辺から棒状の把手をつくりだすが、裏側に溝をほりこんでいる。なお、開口部の外底は斜めに削り、底の厚さを次第に減じているので、たとえば十能のようにものをすくいあげる道具に比定しうる。全体に加工が粗く、手斧はつりの刃痕を顕著にとどめている。現存長37.8 cm、最大現存幅10.6 cm、高さ6.7 cm。材；スギ。出土層位不明。

フ ネ i 槽 (43) 心はずした二つ割りの丸太を用い、木裏面を上面にあてる横木取りの槽である。長辺部しか残存しないが、小判形の全形を想定することは可能である。底部は内外とも平滑面をなし、口縁は斜めに立上る。全面は手斧はつりで仕上げたらしく、はつり面をよくとどめている。現存部長12.3 cm、高さ6.8 cm。材；マツ。出土層位不明。

iv 建築部材 (PL. 36・37, Tab. 7~11, Fig. 33)

建築部材としては、梯子のほか柱や板などがある。梯子がほぼ旧状をとどめるのに対して、

1) 上東遺跡のオの町調査区から類似のものが2点出土している。岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集、山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ、1974、p. 125・146。

他は片々とした部材で、建築物を復原しうるほどの遺物はない。これらの部材は主として下流域の AS06 を中心とする範囲でまとまって発見されている。

a 梯子 (44・45) 一木で作るものと 2 本の支柱に横木をわたした組梯子とがある。44 は黒木の心持丸太からつくる一木の梯子である。背面は円周のおよそ 1/4 をはつりおとして平滑面とする。表面は全長を 4 等分して 3 段の足かけを削りだす。足かけの上面は身に対して垂直面をなす半円形を呈し、下部は次第に深く削りこんで次の段に移行する。段の外周面と身の両側面には一切の加工をくわえず、皮つきのままである。上端木口は平滑面をなし、弥生時代の類似品のように高床のネズミ返の下面に挿入する柄をつくりだしていない。全体は手斧はつりで整えるが、背面と最下段以下の加工はきわめて粗雑である。全長 158.7 cm, 幅 11.0~9.3 cm, 厚さ 9.0~4.0 cm, 段の間隔 (上端から) 33.5+36.1+39.8+49.3 cm。材; コナラ亜属。BA08Ⅲ砂出土。

ハ シ ゴ

45 は 2 本の支柱に横木をわたす組梯子である。材は黒木丸太で、斧で両端を切断したり、横木をわたす部分を窪ませる程度の加工にとどまる。支柱には本を下にして横木を固定する浅い溝を 3 個入れる。横木は枝なし灌木を用いたらしく細い。2 本の横木が支柱と重なって出土したが、横木をとめたであろう紐などの痕跡はなかった。なお、支柱の 1 本は他より若干細く枝わかれている。支柱長 111.5 cm, 直径 5 cm 内外, 横木の間隔 (上端から) 25+27+28+31.5 cm, 横木の長さ 39 cm, 直径 3 cm 内外。材; コナラ属。BA08Ⅲ砂出土。

b 柱材 (46~56) ここでいう柱材というのは厳密な意味ではなく、柱状の木材という程度の意味である。46 は丸太材の一木口を斧で切断したあとをとどめ、その内寄りに手斧はつりによる切欠きをいれている。他の一端は折損。現存長 62.4 cm, 径 5.4~5.0 cm。材; リョウブ。AS07Ⅰ黒出土。47 は角材。腐蝕のため削り加工の痕跡は不明である。一端では側面から切込みをいれる。しかし折損のため、相欠仕口になるのか、またこの部分から幅を狭めているのか不明である。もう一方の端には表裏に貫通する柄孔をあけた痕跡がある。現存長 71.5 cm, 幅 5.0 cm, 厚さ 2.9 cm。材; ヒノキ。BK16Ⅱ砂出土。48 は細い黒木丸太。末端は折損するが、本は一面から斜めに削って尖らせている。現存長 88 cm, 直径 3.8~2.5 cm。材; コナラ亜属。AS07Ⅰ黒出土。

ハ シ ラ

49 は柱根。表面を手斧はつりで整え、先端を粗い尖頭形に尖らせている。現存長 62.0 cm, 直径 15.7 cm。材; マツ。BK16Ⅱ砂出土。50 は黒木丸太の断片。加工部分をとどめていない。現存長 65.3 cm, 直径 7.5 cm 内外。材; マツ。AS06Ⅰ黒出土。51 は黒木丸太材。両端に斧による切断のあとがみられる。手斧はつりによる浅い切込みが 1 箇所ある。長さ 94.4 cm, 直径 8.0 cm 内外。材; シキミ。AS06Ⅰ黒出土。

52 は黒木丸太材。先端の木口から溝を切りこみ、溝の下部側面に 2 箇所のはつり痕がある。基端は二次的な切断をうけている。桁なし梁をうけている構造材であろう。長さ 179 cm, 直径 7 cm 内外。材; コナラ亜属。AS90Ⅰ黒出土。54 は枝と樹皮をのぞいた丸木。長さ 114.3 cm, 直径 3.5 cm 内外。材; マツ。BA08Ⅲ砂出土。

55 は黒木丸太。両端は斧で整え、基部に枝を載らおとした痕跡をとどめる。長さ 163.2 cm, 直径 12.0 cm 内外。材; マツ, 出土層位不明。

56 は皮をはいだ丸太材。両端を斧で整えるが、基端は両側から削りこんで舟首形を呈する。

柱表面のところどころに手斧などの刃痕がみられ、台形の切込みあとも残る。長さ 167 cm, 直径9.0 cm 内外。材；ヒノキ。AR07Ⅲ砂出土。

イ タ c 板材 (57~76) 板材も扁平な部材という程度の意味であり、特定の用途を推測しうるものは少ない。また、明らかに土工具などの材料とみられるミカン割りの材もこの項にふくんでいる。57は小屋の妻部分を覆う壁板。三枚の板を横につないだもので、現在三角形の隅部が残存している。下辺の隅寄りには3個所の切込みがあり、その上方で一条の押圧痕跡が横断する。あて木の痕であろうか。斜辺は下辺に対して45°の角度にそろえ、木口に沿ってやはり一条の押圧痕跡がある。全体に保存が悪く、表面の加工痕跡は不明。現存幅84.8 cm, 現存高92.4 cm, 厚さ0.8 cm 内外。材；ヒノキ。AS06黒粘土出土。

58は丸太材を両側面から割裂いた厚手の板。腐蝕が著しく加工痕跡はすでに消失している。現存長181.0 cm, 幅9.0 cm 内外, 厚さ3.5 cm 内外。材；イヌマキ。BA08Ⅲ砂出土。59は板目の割板材。木目にそって割裂いた痕跡をとどめ、手斧による整形をくわえていない。一面に割裂時に生じたらしい段違いが上下に通っている。現存長158.4 cm, 幅16.0 cm, 厚さ1.8~3.6 cm。材；ヒノキ。BA08Ⅲ砂出土。

60は柱目の割板材 (Fig. 33)。一端に焼け焦げの痕跡があるが、ほぼ完形品である。一側縁にそって2孔で1対となる孔が上下2個所にある。おそらく板を綴じ合わせるためであり、壁板の可能性がつよい。長さ142.0 cm, 幅13cm 内外, 厚さ1.2 cm 内外, 継ぎ孔の位置(2孔間の中心をとる。保存良好の木口から)41.6+51.0+49.4 cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

ホゾ穴のある板

61は板目の割板材 (Fig. 33)。一端は腐蝕しているが、ほぼ完形。板の中央の端寄りにそれぞれ1個の柄穴をほる。一方の穴は著しく腐蝕しているが、他は旧形を保っている。長さ133.0cm, 幅17~15 cm, 厚さ1.0 cm 内外。柄孔の位置(保存良好の木口から柄孔の心まで)33+68+32 cm。材；ヒノキ。BU07Ⅰ黒出土。

62は板目の割板材 (Fig. 33)。一端が腐蝕しているが、61と同様に両端寄りに各1孔の柄孔をあけている。長さ64.0 cm, 幅13.5 cm, 厚さ1.3 cm, 柄孔の大きさ5.0×3.0 cm。柄孔の間隔(内々)39.2 cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

63は板目の割板材に柄孔をあけたもの (Fig. 33)。この例では板が厚く、木口面をていねいに丸味をもたせて削り、若干の磨耗痕がある。一方の柄孔部分は欠損しているが旧形を知ることとはできる。長さ73.6 cm, 幅9.7 cm, 厚さ2.0~2.5 cm。柄孔の大きさ7.0×3.0 cm。柄孔の間隔(内々)42.9 cm。材；ヒノキ。AS06Ⅰ黒出土。

64は柱目の割板材で完形をとどめる (Fig. 33)。割裂き時に生じた高い部分を粗く手斧はつりする程度の加工にとどまり、それ以外の部分には割裂きの面をのこしている。一方の側面から溝しゃくりをいれ、上下に通している。また溝を貫通する目釘孔が3個所にみられる。おそらく縦矧ぎで板をつなぐ加工であろう。目釘は固定のためのもの。長さ137.4 cm, 幅27 cm, 厚さ1.7 cm。溝の深さ1.7 cm 内外, 同幅0.3 cm。材；ヒノキ。BK12Ⅰ黒出土。

65・66はともに幅の狭い板目の板材 (Fig. 33)。表裏は加工をくわえず、割裂きの面をとどめる。また、腐蝕や焼け焦げによる損傷が目立つ。ともに材はヒノキで、BA08Ⅲ砂から出土。65は残存長82.0 cm, 幅10.9 cm, 厚さ1.0 cm 内外。66は残存長77.9 cm, 幅12.3 cm, 厚さ1.1 cm。67も板目の割板材。表裏に加工をくわえず、一方の木口辺に斜めの切欠きをいれ、

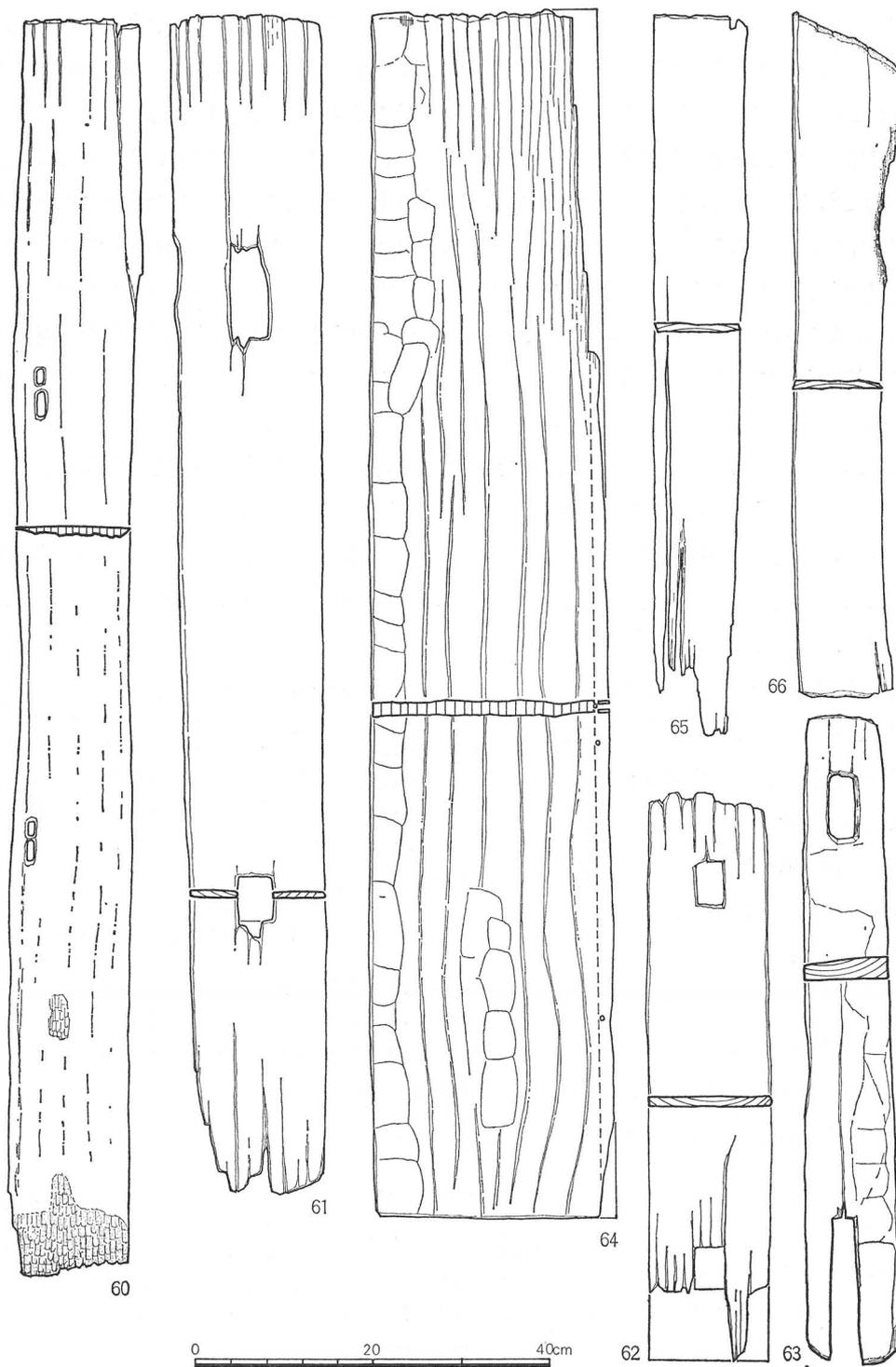


Fig. 33 SD6030出土板材実測図

軸状の突起をつくるが意味不明。また長辺の2ヶ所に切欠のようにみえる部分があるが、これは腐蝕による。長さ108.7 cm, 幅9.6 cm, 厚さ0.6 cm 内外。材；針葉樹。出土層位不明。

68は厚手の板目板を丁寧に加工した小形の板。木口の四辺を面取りし、一方の側面に端止めの溝抉りをいれる。この溝は材の一方に片寄っており、それ以下の表裏の腐蝕が著しいのは使用法的一端を示すかもしれない。長さ53.1 cm, 幅 8.0 cm, 厚さ2.4 cm。溝の長さ26.4 cm, 同幅1.0 cm, 同深さ1.7 cm。材；ヒノキ。BK12 I 黒出土。

第IV章 遺物

69は二つ割の丸太を加工したもの。現状では二次的に縦に割られている。中央に丸太の表面をのこす台形の隆起をのこし、その上下を板状に薄く削平する。長さ61.7 cm。現存幅6.0 cm、現存高6.6 cm、隆起部高さ4.5 cm。長さ16.7 cm。材；イチイ。AS06 I 黒出土。

70は割裂きの粗い木目を残す割板。板のほぼ中央に貫通する柄孔をあけている。柄孔は表裏から鑿であけたらしく、喰違いを生じている。両端の木口は斧で粗く切断した状態にとどまる。長さ44.3 cm、幅7.2 cm、厚さ2.2 cm、柄孔2.4×1.8 cm。材；スギ。AR06 I 黒出土。71も板目の割板。表裏ともに割裂きの粗面をとどめ、両木口部分を斜めに粗く削りおとす。長さ6.1 cm、幅6.0 cm、原さ1.3 cm。材；ヒノキ。AR06 I 黒出土。72は心持板材の断片。両端はすでに切断されているが、一方の木口に柄孔の痕跡をとどめている。長さ17.7 cm、幅8.5 cm、厚さ4.0 cm 内外。材；ヒノキ。出土層位不明。

73・74・75・76は丸太をミカン割りにした土工具などの材料。表裏に割裂きの粗面をとどめるほか、加工はみとめられない。いずれも材はコナラ亜属。73は長さ35.6 cm、幅6.5 cm、厚さ2.5~1.2 cm。AT07 III 砂出土。74は長さ30.6 cm、幅4.5 cm 内外、最大厚3.9 cm。BK16 III 砂出土。75は長さ28.0 cm、幅3.9 cm、厚さ1.8~0.4 cm。BK16 II 砂出土。76は長さ38.5 cm、幅8.9 cm、厚さ4.0 cm 内外。BA08 III 砂出土。

d 杭 (77~80) 雑木の灌木を利用し、一端を斧で粗く尖らした杭。いずれも断片で、全長を知りうるものはない (Tab. 7)。

番号	(残存長) (直径)		(材種)	(出土位置)	(層位)
	cm	cm			
77	64.3	4.5	サカキ	AR 06	II 砂
78	24.7	5.5	サカキ	BK 16	III 砂
79	45.4	4.5	アカガシ属	BN 16	III 砂
80	56.6	5.0	マツ	不明	不明

Tab.7 杭の寸法

オモリ e 木錘 (81~83) 丸木の断材。木口面と側面の一部を削る程度の加工にとどまり、表面にはなお樹皮をとどめる。81は少しく長いが、平城宮跡の奈良時代木器の例では側面から穴をあけた類似品が発見されているので一応槌の子のような錘に比定しておく (Tab. 8)。

番号	(長さ)	(直径)	(材種)	(出土位置)	(層位)
	cm	cm			
81	31.9	5.9~3.9	シイノキ	AR 06	II 砂
82	17.7	7.0	ツバキ?	BA 07	III 砂
83	20.0	6.3~5.1	ツバキ?	BN 16	III 砂

Tab.8 木錘の寸法

クサビ f 楔 (84~87) 材を割り裂くときに用いる楔に想定しうるもの。丸木と割材との別があるが、いずれも先端を両面からそぎおとし、斧頭状

番号	(長さ)	(幅)	(厚さ)	(材種)	(出土位置) (層位)	
	cm	cm	cm			
84	20.1	4.5	—	シャシャンボ・割木	BB 08	III 砂
85	27.5	5.5	—	サカキ・丸木	BA 07	III 砂
86	10.3	5.8	2.3	コウヤマキ・割木	不明	不明
87	12.0	6.7	2.5	コウヤマキ・割木	不明	不明

Tab.9 楔の寸法

につくる。85の頭頂部には叩き痕がのこる。84は両端を折損しているため、他の部材である可能性もある (Tab. 9)。

棒材 g 棒状部材 (88~119) 棒状に加工した部材を集める。いずれも用途は明らかにしがた。88~94は割材を丸棒状に加工し、一端に突出する節を削りだすもの。多くは二次的に切断されたり半截する加工がくわえられている。ただし、88は表面の加工が丁寧で、端部に斜めの削りこみがあるので、農具の柄になることもかんがえられる。

95~104も割材丸棒の断片であるが、先端に節状の突起をとどめないもの。いずれも二次加工をうけており、原形を知りたい。95は一端をそぎおとして、下部に斜めの切込みをいれる。96は一端に切込みをめぐらしているが、これは切断するための切込みかもしれない。

105~110は割材でつくる角棒の類。部材というよりも木屑の類に属するものかもしれない。ただし、109・110は長大な角棒で、他と異なり建築材として使用された可能性がある。

111~119は雑木の皮付き丸棒。小枝を払ったものや、先端を尖らすものがあり、屋根の木舞などに利用した可能性がある。114と115とは連続する可能性がある、117は唯一の完形品である (Tab. 10)。

h 細板小片 (120~128) 板の小片をあつめる。形状は一定しない。120・125は両端を斜めに截つ。121・122は側面から切込みをいれる。123は一方の木口を細める。124・126は一端を尖らす。127は一端に相欠よりの溝を切る。128は腐蝕が顕著だが、わずかに柄孔の痕跡をとどめる (Tab. 11)。

v その他の木器

(PL. 40・41, Tab. 12・13, Fig. 34)

点数が少ないもの、あるいは形は明瞭であっても用途が不明なものをこの項にまとめる。

a 火鑽臼 (129) 心持ちの角棒でつくる。各面はていねいに削り、上面に6個の扇形の臼部を切込み、その要部にあたる側面にV字形の溝をつける。6個のうち2個は使用されており、円錐形の窪みとなり、その内面から溝にかけて焼け焦げている。長さ27.6 cm、幅2.0 cm、厚さ1.5~1.0 cm。火鑽杵孔径1.0 cm内外。材；ヒノキ。AS07 I 黒B出土。

番号	(長さ) (径・幅)		(材種)	(出土位置) (層位)			
	cm	cm					
88	63.4	2.5	サカキ	割木	BN 16	IV 砂	
89	41.9	2.2	スギ	割木	BA 07	IV 砂	
90	9.8	2.9	ヒノキ	割木	BL 16	III 砂	
91	9.8	1.3	ヒノキ	割木	BB 08	III 砂	
92	15.7	3.1	ヒノキ	割木	BK 16	III 砂	
93	18.3	1.9	ヒノキ	割木	BA 08	IV 砂	
94	19.9	1.1	ヒノキ	割木	BA 07	IV 砂	
95	62.5	3.0	スギ	割木	BK 16	III 砂	
96	53.8	2.4	ヒノキ	割木	BA 07	III 砂	
97	48.3	3.0	ヒノキ	割木	BN 16	IV 砂	
98	49.2	3.6	クマノ	リ	割木	BA 07	III 砂
99	21.8	2.0	スギ	割木	BA 08	II 砂	
100	22.1	2.8	ヒノキ	割木	AB 08	III 砂	
101	12.2	2.4	スギ	割木	BA 07	IV 砂	
102	15.1	1.0	コウヤマキ	割木	AR 06	II 砂	
103	11.0	2.8	針葉樹	割木	BA 07	IV 砂	
104	28.3	2.2	コナラ亜属	割木	AR 06	II 砂	
105	20.3	2.4	ヒノキ	割木	BN 16	II 砂	
106	25.9	2.2	スギ	割木	BA 08	II 砂	
107	13.3	2.4	ヒノキ	割木	BA 08	III 砂	
108	18.6	3.9	サカキ	割木	BN 16	II 砂	
109	12.0	3.2	ヒノキ	割木	AS 07	III 砂	
110	132.5	2.8	ヒノキ	割木	BA 08	III 砂	
111	38.7	2.0	サカキ	丸木	AS 07	I 黒	
112	30.0	1.4	ヒノキ	丸木	BB 08	II 砂	
113	43.1	1.8	ヒノキ	丸木	BA 07	III 砂	
114	53.0	1.4	サカキ	丸木	AS 07	I 黒	
115	48.8	1.8	サカキ	丸木	AS 07	I 黒	
116	58.0	1.6	イボタ	丸木	AS 07	I 黒	
117	109.5	1.3	リュウブ	丸木	AS 08	I 黒	
118	84.8	2.7	ヒノキ	丸木	BA 08	III 砂	
119	12.1	2.5	ヒノキ	丸木	AR 06	黒粘土	

Tab.10 棒状部材の寸法

番号	(長さ) (幅) (厚さ)			(材種)	(出土位置) (層位)		
	cm	cm	cm				
120	11.2	2.3	0.8	ヒノキ	AR 06	I 黒	
121	6.8	2.9	0.8	ヒノキ	BA 07	IV 砂	
122	5.8	2.3	0.9	ヒノキ	BA 08	II 砂	
123	7.4	2.9	0.8	アカガシ属	AS 06	II 砂	
124	16.4	1.9	0.4	ヒノキ	AR 08	III 砂	
125	21.1	5.8	0.8	ヒノキ	BN 16	III 砂	
126	21.6	2.9	1.4	スギ	BA 07	IV 砂	
127	31.8	4.1	0.7	ヒノキ	BA 08	II 砂	
128	30.6	5.4	1.7	スギ	AS 06	II 砂	

Tab.11 細板小片の寸法

角棒

丸棒

細板

ヒキリウス

第IV章 遺物

木製の矢

b 木矢 (130・131) 割材からつくる。鏃部を紡錘形にかたどり、丸棒の矢柄をともづくりにする。折損のため全長は不明。2点は、ほぼ同形だが、131のほうが鏃部と矢柄部の境がはっきりしている。福岡県湯納遺跡では籐竹の矢柄に木鏃を装着する実用品らしいものが出土している¹⁾。また平城京左京一条三坊十五・十六坪遺跡からも、奈良時代の同形の木矢が発見されている²⁾。後者は祭祀用の形代である。ともに材はヒノキ。130は現存長20.8 cm、鏃部長約5.5 cm、同最大径1.8 cm、矢柄部径0.7 cm。AS06Ⅱ砂出土。131は現存長10.1 cm、鏃部長4.2 cm、同最大径1.8 cm。AS06Ⅱ砂出土。

タテグシ

c 堅櫛 (132) 細い竹ひごをならべ、中央を糸でかがってU字形につくる堅櫛。古墳から発見される同種のものとは変らない。現在、歯部を欠き頭部のみがのこる。竹ひごは11本で、折曲げて22本の歯とする。歯と頭部との境を幅広く糸でまき、黒漆をぬりあげている。現存長2.0 cm、幅2.4 cm、厚さ0.15 cm 内外。AS07Ⅰ黒A出土。

セオイゴ
ハシゴ

d 栓形木器 (133) 頂部を円形の鋏頭形にかたどり、角柱の足をつくりだす栓形の木器である。足の先端は二次的に切断されている。部材を結合する具であろうか。用途は不明。長さ6.1 cm、頂部径2.9 cm、足部径1.5×1.2 cm。材；アカガシ属。AR07Ⅲ砂出土。

e 背負梯子 (134~137) 灌木の股部を利用した一種の支柱。一枝を角状にのこし、幹部の両側から削平して扁平にし、一定の間隔をおいて方形の柄孔をあける。135は幹部の両端を欠くが、柄孔を5個あけ、1孔には楔止めにした横木の一部が残存する。136は股部の破片で、135と対になるのものであろう。股部をはさむ柄孔の間隔は135と同じである。137は同種の破片で基端部にあたる。134は薄い針状を呈し、材とつくり方からして135の先端に想定できる。以上のような部材から左右に2本の支柱をたて、五段以上の横木をわたす形が想定できよう。その形態を復原すると、現在、地方の民俗例にみられる有爪形の背負梯子に近い形態をとる。薪炭や稲、マグサなどを背負って運ぶ道具で、左右の支柱に三・四本の横木をわたし、角状に外方にのびる股部で荷を支える。本例にそうした用途を想定して大過なかるう (Tab. 12)。

漁具

f 嘴状木器 (138) 木の股部を利用した道具。身部を幹にとり、柄部を枝にとるのであるが、身に対して柄が鈍角になる。身は木裏面を削平するにとどまるが、中央に稜をとおして両側縁を薄くする。先端が折損しているため使用法を知ることができない。2本で1対となり、その間に網をはった漁具になるかもしれない。現存長28.3 cm、身最大幅4.1 cm、厚さ1.9 cm、柄径2.3 cm。材；クリ。BA07Ⅲ砂出土。

g 脚状木器 (139・140) 139は基端を欠き、140は末端を焼失しているが、同形の部材にみえる。心持材を加工するのだが、末端に自然面をとどめるコブ状に削りのこし、その下部

番号	(残存長)	(幅)	(厚さ)	(柄孔径)	(材種)	(出土位置)	(層位)
	cm	cm	cm	cm			
134	18.4	2.4	1.0	1.0×1.2	サカキ	AS 07	1 黒
135	86.2	3.4	2.4~1.6	1.4×2.6	サカキ	AS 07	1 黒
136	25.4	2.6~4.8	1.5~2.0	1.8	サカキ	AS 07	1 黒

Tab.12 背負梯子の寸法

1) 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1976, p. 112。

2) 『平城宮報告Ⅵ』1974, p. 82。ここでは不明

木器としている。

3) 脇田雅彦「背負い縄・背負い板の形態」『民具マンスリー』11巻5・6号, 1978。

3 木製品

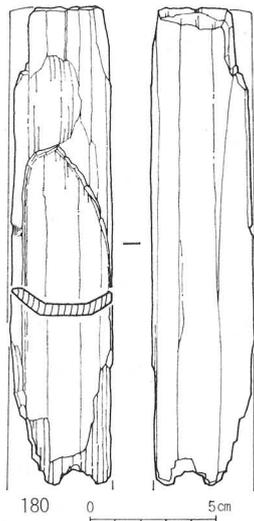


Fig. 34 刀鞘実測図

を角柱形にし、基端を蹄状にかたどる。案などの脚に想定しておく。139は現存長22.8cm, 最大径4.1×3.2cm。材;サカキ。

BA 08 II 砂出土。140は現存長24.8cm, 最大径3.6cm。材;エゴノキ。AS 07 I 黒出土。

h 刀鞘(180) 片面に刀身を挟むための刃込みを施し、外面には曲面をつけた鞘の先端近くの断片である (Fig 34)。現存長19.1cm, 最大幅3.9cm, 厚さ1.2cm。材;スギ。BN16 II 砂出土。

i ヒレ付丸棒(141) 割板から加工したもので、軸状の丸棒に板を接合したような形につくる。現状では両端を折損しているため、用途は不明。現存長17.3cm, 最大幅4.5cm, 丸棒径1.3cm。材;サカキ。BA07 I 黒出土。

j 節のある丸棒(142) 割材を加工した丸棒。先端を円頭形にととのえ、その下部に長方形の柄孔をあけ、やや間隔をおいて裳状の節をつくりだす。柄孔は少しく斜めに傾き、内に柄の断片をとどめる。節以下は折損のため不明。現存長36.3cm, 直径2.0cm内外。柄孔2.1×0.4cm。材;スギ。AS07 I 黒出土。

k 挟りのある板材(143) 長方形の板材の一長辺から台形の挟りをいれたもの。他遺跡からも類似品が比較的多く発見されているが、用途不明。長さ25.8cm, 幅10.0cm, 厚さ1.0cm。材;ヒノキ。AS 07 I 黒出土。

l 撥形木器(144・145) 割板材を撥形にかたちどり、短辺の中央に柄をつくる。一面は平滑面をなすが、他面の中央部には、板を横断する幅広の仕口を切りこむ。144では平滑面長辺に面取りがみられ、145では平滑面に針書きの刻線がある。ともに、長辺の木口面に磨耗痕がみとめられ、一種の台脚のような用途を想定しうる。ともに材はヒノキ。144は長さ19.8cm, 幅12.9~5.6cm, 最大厚2.0cm, 仕口幅8.1cm, 同深さ0.4cm。AR06 II 砂出土。145は長さ18.7cm, 現存幅4.9cm, 最大厚2.0cm, 仕口幅6.2cm, 同深さ0.3cm内外。BA08 II 砂出土。

m 加工のある木片(146~152) なんらかの加工のある木片をあつめる。146は側面からV字形の切込みをいれた割板。147は丸木に柄孔をあけたものの断片。148は丸木を半割りにし、刃先状に削る。149は扁平な材に左右から切込みをいれる。150は目針孔をとどめる板片。151は削り屑。152は柄孔の痕跡をとどめる丸木断片 (Tab. 13)。

番号	(長さ)(幅)(厚さ)			(材種)	(出土位置)(層位)
	cm	cm	cm		
146	28.9	3.7	1.4	ヒノキ・割木	AS 07 I 黒
147	11.9	3.9	1.8	ヒノキ・丸木	AS 07 I 黒B
148	14.5	4.5	2.3	エゴノキ・丸木	AS 06 II 砂
149	14.8	3.4	1.3	アカガシ属・割木	BB 08 II 砂
150	6.6	3.5	1.8	スギ・割木	AS 06 II 砂
151	5.3	4.0	3.5	サカキ・丸木	AR 06 I 黒
152	28.7	6.3	6.9	シイノキ・丸木	AS 07 I 黒

Tab.13 加工のある木片寸法

B SD8520 出土木製品 (PL. 42~44 Tab.14, Fig.35)

佐紀池下層の溝 SD8520 から発見された木器は、出土量としてはさほど多くないが、注目すべき遺物を含んでいる。出土量が少ないのでここでは種類別に分類せず、逐次遺物ごとの記述をくわえることにする。

一木づく
りのスキ

a 一木鋤 (153~157) いずれもアカガシ属の原木をミカン割りにした材からつくったもの。152は丸棒状の柄にT字形の把手を削りだし、柄の下部がわずかに後面に屈曲する。身の後面はほぼ中央に柄端につながる隆起をつくり、前面は舟底形を呈し左右に向って厚さを減じる。身の肩部は左右で幅を異にし、向って右側肩幅が広い。これに対応して刃先の摩耗状態も右の方がはげしい。左足利きの人の所有品であろう。全長107.8cm, 身部長20.5cm, 同幅14.4cm, 同最大厚2.2cm, 柄径2.9cm, 把手幅9.0cm。WG54Ⅱ砂出土。154も同形の鋤だが、やや短い。丸棒状の柄は直線的で、身の肩部で終る。把手は一部欠損するが、孫の手状を呈し、三角形にちかく、長辺の木口を折返したように厚くのこしている。身の後面は平滑面をなし、前面はゆるやかな舟底形。この例では身の向って左肩部の幅が若干ひろく、その直下の刃も著しく磨耗している。右足利きの人が使ったもの。全長98.4cm, 身部長21.9cm, 同幅15.7cm, 同最大厚さ1.8cm, 柄径2.9cm, 把手現存幅6.2cm。WO54出土。155・156は鋤身の断片。155は身の上部が厚く、先の部分のみ裏面から削って薄くする。とくにこの部分には再加工の削り痕跡がみとめられる。現存長23.1cm, 復原幅14.5cm, 最大厚2.0cm。WE54出土。156は身の刃先の断片。現存長6.0cm, 現存幅4.4cm, 厚さ0.9cm。WE54出土。157は柄の把手の断片。逆鉾形を呈する類のものに復原しうる。復原幅11.2cm, 厚さ1.7cm。WD26出土。

膝柄股クワ

b 膝柄股鋏 (158) ミカン割りの板材からつくる長大な股鋏の身。全長のおよそ7割を身とする二股の鋏であり、刀形を呈する身の上部に撥形の着装部をつくる。その棒状部分は前面を平滑面とする半円形の断面形とし、柄の着装の便をはかる。しかし、他の類似品にみられるような先端の節状のすべりどめを欠いている。基部の下部は左右にひろがり、のびきったところの左右に三角形の袂りをいれ、柄の緊縛位置とし、それ以下が刃部となる。刃部はわずかに内寄りを厚くし、後面外縁に法面をつけ、先に向うにしたがって薄くする。また、ほぼ半分以下の刃部に磨耗痕がみとめられる。全長82.6cm, 最大幅13.9cm, 最大厚2.0cm。材；アカガシ属。WF53出土。

ヨコツチ

c 横槌 (159・160) 心持丸木を加工した同形の横槌。砲弾形の身部に円柱状の柄をつくりだす。全面はていねいに削平し、柄頭を太く削りのこす。2例とも身の側面周囲に使用による磨滅痕跡が明瞭にのこる。身部の木口面には粗い面取りがみとめられ、7の木口面には鋸による切断のち小刀のようなもので調整した痕跡が見られる。材はともにサカキ。159は全長28.4cm, 身部長17.0cm, 同最大径10.0cm, 柄径3.0cm。WF54出土。160は全長30.0cm, 身部長14.1cm, 同最大径8.5cm, 柄径2.8cm。WF54出土。

ハシゴ

d 梯子 (161) 心持丸太からつくる一木の梯子。背面は円周のおよそ1/3をはつりおとして平滑面とする。両側面もやはり手斧はつりで平滑にととのえ、表面の足掛けの部分のみをもとの表面にちかい高さに削りのこす。足掛けの上面は身に対してほぼ垂直面をなす半円形を

呈し、下部面は次第に深く削りこんで次の足掛けに移行する。梯子の最下端は両側面から斜めに削る尖頭を呈する。残存は足掛けを2段のこす下半部で、上半部は二次的に切断されたく、両側から刃物で切込みをいれ、中央部で折りとった痕跡をとどめる。現存長68.9 cm、幅10.6 cm、最大厚7.1 cm。材；コナラ属。WG54出土。

ハ コ

e 箱形容器 (162) 割板材から木裏面を上にし、横木取でつくる箱形容器の断片。平面は長方形を呈し、その短辺を木口面にあてたようである。底部を欠くが、口縁部が斜め上方に立上る厚味のある器壁で、口縁端面が平坦面をなし、その外側が直立する。底部外面の剝離状況から、底には長辺にそう台脚がついていたものとおもわれる。全体は手斧はつりでつくり、口縁の周囲のみを小刀もしくは鉋のような刃物でいねいととのえ、内面には丸鑿様の削痕跡をとどめる。現存長19.8 cm、現存幅16.5 cm、現存高4.8 cm。材；ヒノキ。WC56 出土。

f まないた (163) 割板材からつくる。木心をさけて木裏面を上にし、横木取りのまないた。平面形は四隅を面取りした長方形につくり、上面を平坦面とし、下面に台脚をつくりだす。台脚は短辺にそって2個あり、その断面は梯形を呈する。長辺の両側面は直立するが、台の側面は内側に向って斜めになる。全面にわたって腐蝕が著しく加工痕跡などは不明であるが、上面に刃痕の刻線が無数にのっている。長さ68.2 cm、幅40.0 cm、高さ7.0 cm。材；スギ。WD55出土。

まな板

g 編み巻き板 (164~167) 細板にアシのような繊維を巻きつけたもの。現状では4片にわかれるが、もとは同じ個体であつたらしい。ただし、裏面からV字形の溝をいれて切断し、断面にまで削り加工がおよんでいるため、接合できない。板目板の表裏を刀子様の刃物で粗くととのえ、両側面を面取りした細板を芯にし、アシを編みかつ巻く。つまり、表面に4条のアシを長辺にそろえて経とし、これを短片方向の緯でござ目に編む。裏面には経をおかず、コイル巻状を呈している。165の中央部の崩れているところでは、経のアシが重複する部分があり、継ぎ目であることがわかる。緯の継ぎ目は明らかでないが、末端と先端を重ねて編みこんだもののようである。

編み巻き板

164と167では短辺に接する一側縁を斜めに削り、木口の角をおとしていること、木口面のやや内側に刃先で一孔をあけ、ここには編み巻きがおよんでいないことから、本来の両端であったことを示す。一方、4枚の細板は、17.5~18 cmのほぼ同一長さに切り揃えられているが、165には両端、164・166には一端の木口切断面に斜めにあけた木釘孔痕がある。このことから、もと同一間隔でなにもものかに固定されていた箇所を切断位置に選んだことを示している。

仮りに4枚が連続するものとして全形を推測すると長さ約72 cmとなり、両端をふくむ5箇所を固定する部材が想定でき、その際ござ目の面が表面に出ていたことになる。長さ17.5 cm、幅2.7 cm内外、厚さ0.7 cm、アシの幅0.3 cm内外。材；ヒノキ。WC54 出土。

h 加工板材 (168・169) とともに広葉樹の板をていねいに加工したもの (Fig. 35)。168は少しく弧面を呈するが、上下木口部で折損している。169は左右両側がやや薄くなる厚板。折損している木口部は材の端を示しているようである。しかし、もう一方の端は削りとりの面が粗く、製品ないしは二次的に切断した痕跡のようにみえる。ともに部材になるのであろうが用途不明。168は長さ34.5 cm、幅11.0 cm、厚さ1.1 cm。材；ホオノキ。WD54 出土。169は長さ59.4 cm、幅13.2 cm、厚さ2.8 cm。材；アカガシ属。

加工のあ
るイタ

棒 i 棒状木器 (170~178) 用途は明らかにしがたいが、棒状の形をとる木器が9点ある。170は枝をはらった心持丸木の一端を加工したもの、木口面を斜めに粗く截ちおとし、その下部を浅く削りこんで、端部を亀頭形にする。それ以外の面は樹皮を除く程度でなお樹皮が残っている部分もある。一方の木口は折損する。171も170と同様の形をとる。現在頭部のみを残し、下部は折損する。172は心持丸木の両端を亀頭形に加工したもの。両端部分に削りの加工

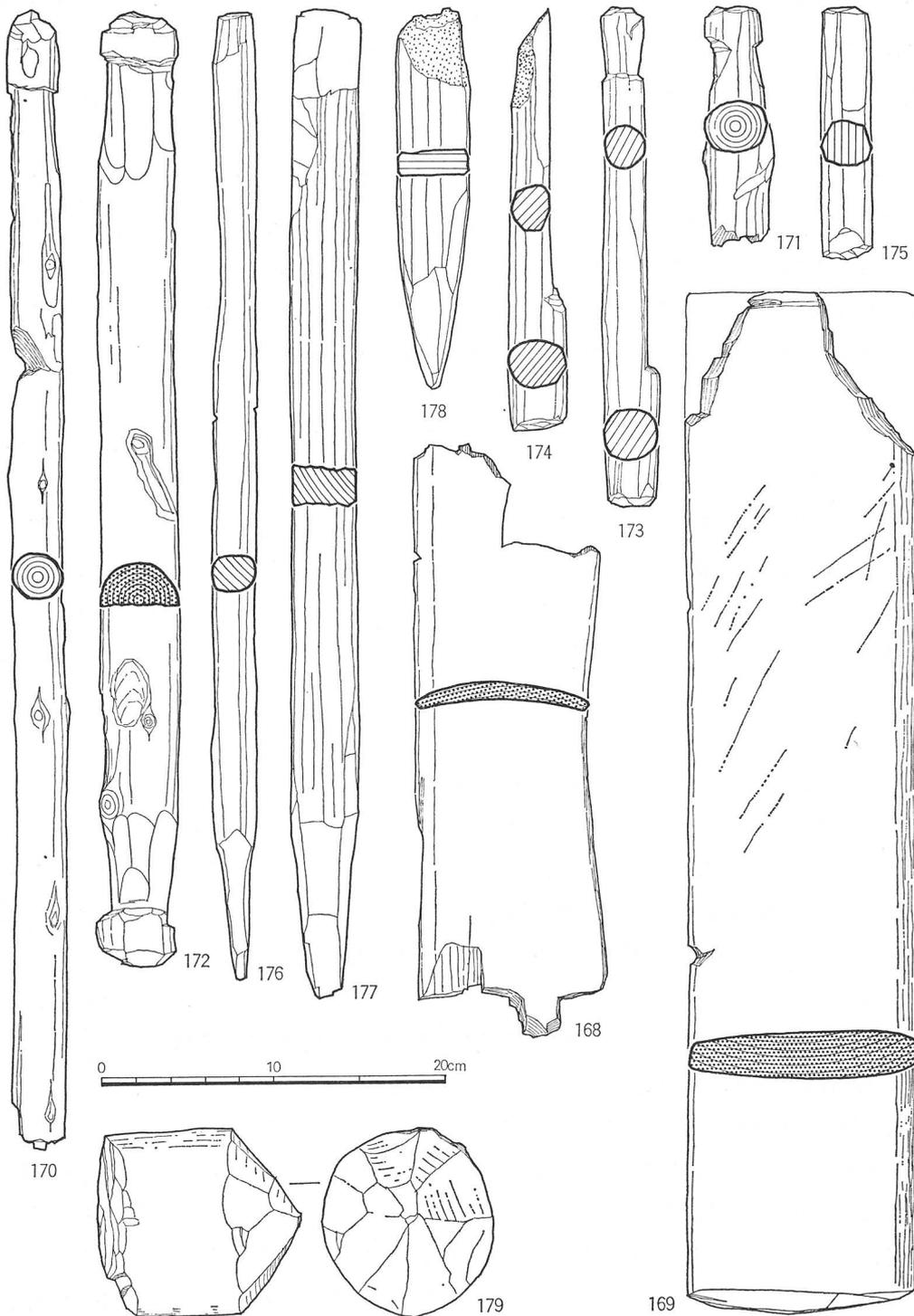


Fig. 35 SD8520出土板・棒製品実測図

をくわえるほかは、表面の樹皮を除くにとどまる。現在、縦に半截されている。紡織具のチマキかとも推測されるが、後考をまちたい。173・174は同形の棒であるが、174は一端を焼損している。ともに割材からつくる丸棒で、全長の1/4ほどの下部を太くし、それ以上を細くする。上端部は少しく削り細めて円頭形につくる。175は面取りをほどこした粗い棒で、二次的に切断されている。176は割材でつくる角棒。一方の先を尖らせている。177は割裂面をとどめる角棒。一端を尖らせ、もう一方の端も斜めにそぎおとしている。杭か。178も173と同形のもの先端で一端が焼損している (Tab. 14)。

番号	(長さ) (直径)		(材 種)	(出土位置)
	cm	cm		
170	66.3	3.0	イヌマキ?・丸木	WD 55
171	13.9	3.8	サカキ・丸木	WF 54
172	55.6	4.1	コウヤマキ?・丸木	WD 53
173	29.0	3.2~2.4	スギ・割木	WE 56
174	24.5	3.4~2.3	スギ・割木	WE 55
175	14.6	2.9	ヒノキ・割木	WF 52
176	56.3	2.5	スギ・割木	WD 52
177	57.7	3.6×2.4	カヤ・割木	WG 55
178	22.1	4.2×1.5	ヒノキ・割木	WE 54

Tab.14 SD8520出土棒状木器寸法

j 柱切断材 (179) 心持丸太の丸柱を切断したもの。周囲は樹皮を除くにとどまり、両端には斧で切断した痕跡をとどめる。なお、尖頭形に削る方の木口の切断が新しい。長さ11.8 cm、直径10.8 cm。材；ヒノキか。WG54 出土。

4 金属器

6ACA-SD8520 から小型素文鏡が1点出土した。

a 小型素文鏡 (PL. 44, Fig. 36) 直径が2.75 cmの素文鏡で、鏡面は凸面につくり、鏡端は僅かに厚みを増し、平縁状に丸くおわる。鈕は一部湯回りが悪いため、円形にはならず、平面長方形に近い。頂部は鑄造後に研磨している。厚さは鈕近くで0.68 cm、周縁部で0.63 cm。鈕幅0.75×0.40 cm、鈕高0.25 cm、総高0.33 cm。光沢をおびた黒色を呈す。WD55・灰黒色砂質土出土。

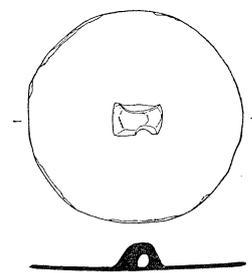


Fig. 36 小型素文鏡実測図 (実大)